
センター開始！

日高鳴海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

センター開始！

【Nコード】

N6523Z

【作者名】

日高鳴海

【あらすじ】

某県桂瀬市私立桂瀬高校に通う短めの焦げ茶色のツンツンとした髪型の一年生、成田洋 なりたよう は一人の女子生徒に恋をした。その女子生徒は黒髪のポニーテールの武道少女、久遠寺望美 くおんじのぞみ に告白するが玉砕してしまう。しかし、諦めの悪い洋は望美の父が趣味同然で行っている久遠寺道場に入門した。この瞬間から、洋達の波乱な日々が始まった。

プロローグ(前書き)

えっと、新しく始めました。よろしかったら感想など下さい

プロローグ

「好きです！ 付き合ってください！」

某県桂瀬市の私立桂瀬高校の体育館裏にて一人の男子生徒が女子生徒に告白を行っていた。彼の名前は成田洋 なりたよう ツンツンとした短めの焦げ茶色な髪に絵に描いたような中肉中背の男子生徒。

「……」

一方、男子生徒に告白されたというのに顔色どころか眉すらピクリともしない、凜とした目、黒くケアが行き届いた長い髪をポニーテールに結っている女子生徒、久遠寺望美は成田洋の目を見る。

洋は顔を少しだけ赤らめ告白の答えを待っていると、

「すまない、お前とは付き合えない」

それは洋が玉砕した、その現実を突き付ける答えだった。

ガン！ と砕け散りそうなガラスのハートを死守しながら洋は望美に縋るような思いで、

「ど、どうしてですか……？ その、理由を……」

正直立っているのもやっと洋はそんな足に鞭を打ち、何とか立たせていたりする。

望美はフツと、少しだけ息を吐き出し、洋の顔を真っ直ぐに捉える。

「だってお前は弱いだろ」

「え……？」

「見た感じ、筋肉もあまり鍛えられていない。オーラも感じないし、パートナーになるのだから私と対等な立場に立ってくれないと困る」

「対等な立場……？」

「そつだ。私位か、それ以上強くなってもらわないと付き合う事は出来ない」

洋は彼女の話をも黙って聞く。つまり彼女は強い男が好きだと言っている。

望美の理想の男性像は洋の現在の姿では到底たどり着けない高嶺の理想像である。

望美はそう言つて、体育館裏を離れていく。その後ろ姿を洋は愕然とした気持ちで見る。

あの背中は今この自分には到底手に取る事は不可能。

だつたらどうする？

諦めるのか？

(……いや、諦める訳ないだろう！)

成田洋という人間は諦めの悪い人間なのだ。一度転んだくらいじゃ洋は諦めない。

「強い男……か。確か久遠寺さんって剣道やっているって噂を聞いたことがあるな」

『剣道』という単語は洋にとって馴染み深いものだったりする。

洋はツンツンとした髪をボリボリと掻き、

「…………行くか」

そう呟き、体育館裏を後にする。

プロローグ（後書き）

うーん……こんな感じで続いていくと思います。

第一話・入門試験

「……………」

久遠寺望美は久遠寺道場の一人娘だ。

久遠寺道場には門下生という者は存在しない。理由は父である久遠寺宗一の目利きにあり、人間の本质を見抜く力があり、自分が認められた人間しか門下生にしないスタンスを取っている為である。

望美は胴着を着て久遠寺道場の真ん中に正座していて、左には真剣が刀室に入っている状態で置かれている。

そして望美の周りに藁で作られた藁蓋 わろうだ が後ろと前、四角形になるように四本並べられている。

フウ、と。

少しだけ空気を鼻で吸い、

「ハッ！」

ギン！！ と、目に力を入れ、左に置かれていた刀を抜刀。

抜かれた刀は前にある藁蓋へと向かい、無駄の無い太刀筋でバサッ！ と上側が広がる。

次に望美は構え直し、後ろにあるもう二本の藁蓋へ狙いを定める。これもタコウインナーのように上側が広がった。

この間約十秒も満たない。全く無駄を感じさせない太刀筋。

「ふう……………」

ひとまず一息いれる。

集中力というのは、集中力が高ければ高いほど精神的に疲労するもので、それが途切れればドツとして身体を襲う。

「なかなか腕を上げたね望美」

「！……お父さん、居たんですか」

端から聞いたら失礼な言葉かもしれないが、それは宗一が気を消して道場の中へ入って来たからで本当に気づかなかつたのだ。

朗らかな笑みを浮かべてながら望美の成長を喜ぶ宗一。

しかし望美は、

「いえ、私はまだまだです。証拠に……」

望美は四つある藁蓋の内、左後ろの藁蓋を持ち上げた。その藁蓋は綺麗に広がっていなく、それに切れ目が少しだけ浅いようにも見える。

しかし、よく見なければ気づかない程度であり特別気にするほどではないのだが……。

「ふむ……成る程」

望美の見せた証拠に宗一は納得の色を浮かべる。達人級の間人ならば、望美のようなミスはやらないだろう。

だから修行する。

だから努力する。

だから

武術は面白い。

「まあ、簡単に出来たら苦労はしないからね。僕だって簡単に出来た訳じゃないし」

宗一は達人級の剣術を身につけている。しかし、その域まで行くまで血を吐くような凄まじい努力をし続けた努力の賜物であり、そう簡単にたどり着けない域にいる。

「お前の太刀筋は間違いなく伸びる。これからも精進しなさい」
「はい！ 精進します」

お世辞でもなく、本音を述べた。
望美の返事に満足げに頷き、宗一は道場の襖を開け出て行く。

「……よし」

気持ちを落ち着かせると、望美は再び修行へと戻った。

成田洋は体力が尽きかけていた。
ハアハア、と膝に手を置き、顔を下にして息を整えていた。
久遠寺家は少し大きめの平屋に、外から丸裸になっている渡り廊下を歩くと平屋より少しだけ小さい道場のような建物がある。その建物は縁側があり、そこから中に入れそうな気がする。

「ふう……しかし、ここは凄い場所だな」

四〇段近い階段を含め、ここは凄い場所のような気がした。階段を歩いている時に周りには自然が広がっている。

上に登ったら登ったで、そこにも自然が広がっていて、後ろにはちよつとした山があり、一本のでっかい樹も見えた。

「何というか……夏休みに預けられた田舎の親戚の家みたいだな……」

自分でも何を言っているか訳が分からないが、何故かそんな感想が生まれた。

「さて、久遠寺望美さんは……」

「ウチの娘に何か用かい？」

ビクツと、洋は身体を震わせた。

後ろを振り向くと、そこには黒く長い髪を一本にしている髪型の、優男風の男が朗らかな笑みを浮かべていた。

洋はその場に動けなくなる。

目の前にいる優男は笑っている筈なのに。怖いようなタイプではないような気がする筈なのに。

どうして、動けないのだろうか？

眉間にわずかにしわを寄せていると、宗一は相変わらずの微笑みを浮かべながら、

「君は……ウチの娘と同じ学校に通っているみたいだけれど」

「あ、望美さんのお父さんでしたか……俺は成田洋です！ 実は今日、お宅の娘さんに告白をさせていたただいた者です！」

言い終えたあと、洋は何言っただ俺はーっ！？ と頭を抱えた。自分の失言を悔やんでいると、宗一は先ほどと全く変わらない声色で、

「それで結果は？」

「……粉碎しました」

アハハハ……、と泣き笑いをする洋。もはやどうにでもなれ！ というのが今の洋の心情でもある。

そんな様子の洋を見ていた宗一は長い黒髪をバツが悪そうに軽く掻く。

完全にテンションが落ちしていた洋だったが、ぐわっ！ と、自分より一〇？以上大きいであろう目の前にいる優男風の男を見上げた。

ん？ と宗一は首を傾げたが、次の洋の言葉によって目の色が変わる。

「俺を、久遠寺道場に入門させてください！」

「……………」

久遠寺宗一という人間は自他共に認める人の本質を見抜く天才である。

そんな天才の目が変わる。その目は物の値段を絶対に外さない鑑定士のような本質を見抜こうとする鋭い目。

(……………っ！)

洋は宗一の目を見て背筋に嫌な汗が出る。
鋭い目が洋の目を捉える。

怖い。

目をそらしたいという気持ちを押し殺す。
ここでそらしたら、永遠に望美の隣には居られない、そんな気がしたからだ。

緊張した空気が、この春の和やかな空気を支配する。その間、洋は絶対に目を逸らすことは無い。強くなって望美と付き合いたいという不純な動機であったとしても。洋は諦めたくない。
それほど、彼女の魅力に魅了されたのだから。

(……成る程ね)

宗一は胸の中で納得したかのような事を呟く。
見抜いた。
洋の本質を。

(……あ、ありゃ？ 望美さんのお父さんの目が変わった？)

「えっと、成田洋くんだったっけ？」

「あ、はい。そうですね」

「洋くん、あの樹が見えるかい？」

「え？ あ、見えます。あの大きな樹ですよね」

うん、と先ほどまでの鋭い目など一切匂わせない優しい目を洋に向けながら、山の上に目立つように生えている樹を指差しながら、

「あの樹の下にさ、僕が愛用している刀を忘れてきちゃったんだよね。悪いんだけどさ、変わりに取ってきてくれないかな？」

は？ と洋はポカンとした表情になる。

正直言うとかつたるい。

どうして久遠寺道場に入門しようと四〇段近くある石の階段を歩いてきたのに、何で自分が忘れた物を取りに行かなくてはならないのか疑問だ。

「……まあ、わかりました。どこから行けばいいんです？」

釈然としないまま、洋は宗一の頼みを承諾した。宗一は朗らかな笑みを浮かべながら、

「道場の脇に道があるだろう？ その道をなぞって歩いていけば上の樹にたどり着くよ」

「分かりました。行ってきます」

心底面倒と思いながら道場の脇にある自然に出来たような道歩いていく。

焦げ茶色のツンツン頭が森の緑で見えなくなるまでその様子を眺め、宗一は小さく、フツと息を口から吐き出した。

「お父さん、何をしているんです？」

焦げ茶色のツンツン頭の少年と入れ替わるように来たのは宗一の娘の久遠寺望美。

望美はタオルを首筋を覆うように被せ、健康的な汗を流していた。

「いや、何だか面白そうな少年が来たもので」

「……珍しいですね。お父さんが一目でそこまで人を評価するなんて」

「あの少年からは面白い何かと可能性を感じた。それに僕から目を逸らさなかつたしね。度胸もある」

「……どんな人なんでしょう。私も見てみたいです」

「うーん、夕方から夜にかけて家にくるかもしれないよ」

かもしれない。つまり、来ない可能性も無きにしもあらず、ということを表していた。

望美は怪訝な表情になるが、宗一はまるでそれが見えていないかのようにスルーし、焦げ茶色のツンツン頭の少年が今向かっている大きな樹へと続く森を指差し、娘に問う。

「あの森、お前は知っているかい？」

「当たり前です。私が小さい頃からお父さんに言われていましたから」

望美は一息いれ、

「あの森は道が入り組んでいて、迷ってしまう可能性があるって」

「何だっつてんだこりゃああああ!!」

成田洋は自然に囲まれた森の中で叫び声を轟かせていた。

「どうして、どうして樹に近づかないんだーっ!」

そう、洋は真っ直ぐ歩いているつもりであるはずなのに全く大きな樹に近づけないでいた。

最初は良かった。

何せ真っ直ぐな一本道だったから。でも、二つの別れ道、三つの別れ道とどんどん多くなっていき、完全に袋小路と化していた。

心なしか、同じところを回っているような気がするのは本当に気のせいと思いたい。

「うーん……普通に考えたら真っ直ぐ歩けば着くはずなんだけどな……」

道がない場所も歩いている筈なのに辿り着かない。時間だけが刻々と過ぎていき、得たものといえば何の種類か分からない虫に刺された虫さされ位。体力も消耗していき、洋は遂にその場あつた木に寄り掛かるように座り込んだ。

ここからだと下へ歩き、ちゃっちゃと帰れたり出来そうだ。

森の樹木の隙間から大きめの平屋と道場が見える。それを見ながら帰れば楽に帰れるはずだ。

(そうだよ。帰れるんだよ)

徐々に徐々に、そんな後ろ向きな考えが洋の頭の中を蝕み始める。

そもそも、あの優男風の男の言うことなんざ聞く理由なんてこれっぽっちも無い。

自分が惚れている女の子のお父さんとはいえ、何で自分が忘れた物を取りに行かなくてはならない？

そう考えていくと、段々馬鹿らしくなってきた。

…………… だけれど、

(約束は、守らなきゃなあ)

言った。自分が取ってくると。約束した限り、すっぽかして帰るわけにはいかない。

ガシガシガシ、と焦げ茶色の髪を掻く。

そして洋はゆっくりと立ち上がる。

目線の先には、あの大きな樹。

久遠寺望美はキッチンにてカレーを作っていた。

キッチンにある窓を通じて望美は外を見る。

外の空は夕方と夜を足して二で割ったような空になっていて、夕食が欲しくなる時間帯だ。

(……………)

お玉で鍋をかき混ぜながら、練習終了後に父である久遠寺宗一の言葉を気にしていた。

(……誰、なのだろうか？ お父さんの言っていた人は……)

父があれだけ人に興味を寄せているのだから、よっぽどの玄人くろうと か武士 もののふ か。

(……)

チラリと後ろを向き今の向こうにある縁側に座る宗一を見る。

宗一は胡座で腕を組んで座っていて、何だかよく見ると山を見ているようだ。

(まさか、いや……やりかねないかもしれない)

何故庭で父は道が入り組んだ山の説明を求めたか。

望美は一つの考えが浮かぶ。宗一は久遠寺道場にやってきた少年を何かしらの理由を付けてあの山に登らせたのではないかと。

あの山は望美が小さい頃、父親の言い付けを破りあの山に登った事がある。その時の望美はもちろんというか、やっぱり迷ってしまい、宗一に迷惑をかけてしまったという経験があった。あの時の父の背中の中の暖かみや優しく叱ってくれた事が今でも覚えている。それ以来、望美は無闇にあの山に近づく事はなくなつた。

望美はお手製のカレーをご飯が盛られた皿にカレーを流し込むように盛る。

二つの皿を持った望美は居間へ歩き、テーブルに置いた。

久遠寺家は基本的に和風であるため、地べたに直に座って食事をしている。

日本酒が入った徳利と御猪口を置いた後、縁側にいた宗一は居間の

方に身体を向けた。
朗らかな笑みは相変わらず。

「随分と食欲がそそられる匂いがすると思ったら今日はカレーだったんだね」

「はい、カレールーが安かったんで。では、食べましょうか」
「そうだね」

宗一は立ち上がり、居間のテーブルの手前に座り、望美を座り、

「「頂きます」」

二人はカレーを食べ始める。

カチャカチャと食器と食器が軽くぶつかり合う音がキッチンに響く。食後、宗一は徳利に入った日本酒を御猪口に移し、縁側で飲んでいく。

やっぱり宗一は山の方を見ていた。

(……やっぱり)

望美の予想は確信に変わる。普段宗一はあれだけ山を気にする素振りを見せたことが無い。

間違いない。宗一はあの山に少年を行かせた。

どうして？ と疑問に思っている内に洗い物を済まし、水道を止めた。

冷水に濡れた手をエプロンで拭い、エプロンを外した。

勉強しようと思い自分の部屋に向かおうとした時、

バタッ！

「ん？」

玄関辺りで何かが倒れたような音が聞こえた。

玄関には物を立て掛けていた記憶はないし、望美は何だ？ と思う。

何なんだ？ と思いながら望美は玄関に向かい、引き戸をガラガラ

と開けた。

そこには、

「…………お前は」

玄関の電灯は人が近づくと勝手に光る仕組みになっていて、倒れていた人物を確認するには十分なくらいに照らされている。

そこにいたのは、望美と同じ学校の男子の制服を着用していて、木の枝や葉っぱが制服や焦げ茶色のツンツンとした頭に突き刺さっている少年。

望美はこの少年を見た途端、少しだけ驚く。

(…………どうして、ここに？)

自分がフった少年が今、玄関にてぶっ倒れている。驚くな、という方が無茶だろう。

（木の枝……葉……まさか、お父さんの言っていた少年って……）
「あ、彼来たんだね」

バツと後ろを振り向く。父の宗一がニコニコとしながら立っていた。

「随分と驚いた顔しているね。そんなに驚いたかい？」

「当たり前です！ どうして、この男が」

「話は後で。とりあえずそこに倒れている……成田洋くんを運ぼう」

宗一は望美の言葉を遮り、洋をおんぶし家の中に入っていく。

未だに戸惑いを隠せずにいる望美は少し間を空け、家の中へ入っていく。

第一話・入門試験（後書き）

感想などお待ちしています

第二話・合格

「……うん」

「あ、目が覚めたみたいだね」

洋はつなり声を上げながら目を覚ます。洋は寝ぼけているのか半目状態で久遠寺家の居間を見渡す。

意識がどんどん復活していき、洋はハツとした表情に変わる。

「あの、ちょっといいですか？」

「何だい？」

「あの樹の下には刀があるっていいましたよね？」

「うん、言ったよ」

だからなに？　と言わんばかりの表情の宗一に洋は言う。

「刀、ありませんでしたけど」

恐る恐る、洋は小さい声で言った。

洋はどうにかして山の上まで登ったのはいいものの、そこには刀なんて代物は存在しておらず、ずっと刀を探している内に暗くなっていた。

宗一は手を口につけ、クスリと笑う。洋はその様子を怪訝そうに見ている。

「ごめんね、刀を忘れたなんて嘘だったんだ」

「う、嘘お！？」

悪気が全く見えない謝罪をする宗一に洋は驚愕の声を上げた。

「え、あ、嘘って……じゃあ、あの森の中でずっと刀を探し続けたあの時の俺の苦労は一体……」

泣き笑いに近い声を出しながら洋は森の中で虫や草木と奮闘していた時を思い出す。

「僕が刀を忘れるわけないよ。でも、娘<命<刀。だけれどね」

知らねーよ！ とツッコミたくなっただがもつどうでもいいとばかりにため息をつく。

「……」

ふと、改めて洋は冷静になって周りを見渡した。ここは久遠寺家。自分は縁側で夜風に当たりながら眠っていた。居間には朗らかな笑みを浮かべている望美の父。

（久遠寺家……はっ、つまり！ ここには望美さんがいる！）

先ほどの疲れもどこへやら。すっかりテンションがマックスに近い状態になった洋は再度周りを見渡すが、あの綺麗な黒髪のポニーテールの少女を見つける事は出来なかった。

（あれ……どこにいるんだろう？）

「あ、望美」

「えっ！？」

宗一の口から素敵な名前が出てきた。その名前に反応し洋は居間を見る。そこには学校では見られない可愛らしい水色のパジャマを着て、ポニーテールを解いている久遠寺望美の姿があった。どことなく唇や頬が赤い所を見ると、多分お風呂に入ったのだろう、と洋は予想する。

(望美さんの入浴……)

ぼわわわ〜ん……と、勝手な妄想を始めたと思ったら、

(……げ、鼻血)

鼻から血が流れていた。エロい事を考えたら鼻血が出るというのは漫画やアニメだけのお約束だと思っていた洋にとって、少し驚いていたりする。

「はい、ティッシュ」

「あ、すみません」

宗一から渡された箱型ティッシュを受け取り、二枚抜き取り鼻に詰める。鼻血は意外と簡単に止まり、数秒後には既にティッシュはいらない存在と化した。

「お前はどっしょにここにいる」

「えっ？」

洋が座っている縁側まで近づき、洋より少し離れた場所に座り洋に質問する。

「どっしょにここにいるかと聞いているんだ。私の立場からは大きく

は言えないが、お前は私にフられたんだぞ？ だったら、近づきにくくなる物なんじゃないか……？」

「うーん……まあ、確かにフられて悲しくはなりましたが、望美さんが言う『強い男』になれば、もしかしたら可能性があるんじゃないかなー、って思ったから、ここに来たんです」

「誰から聞いた？」

「友達です」

洋の言葉に望美は頭を抱えた。望美は洋の性格を知らない。だけれど、今なら何となく分かる気がする。

「……なあ、一つ聞いていいか？」

「何です？」

「お前はあの樹までたどり着いたんだよな？」

「はい、そうですけど」

「どうやってたどり着けた？ 私が小さい頃は道を歩いても歩いてもあの樹にたどり着けなかった。小さい頃から見ている森でさえ……」

「お前は、どうやってたどり着けたんだ？」

端から聞けばどうでもいいと一蹴出来そうな問い。洋は山の樹を顔を向けながら言う。

「簡単ですよ。真っ直ぐ歩けばいいんです」

「え？」

あまりにも意外すぎる洋の答えに拍子抜けしたような声が出た。にわかには信じがたいと言わんばかりの表情の望美であったが、洋は頬を右手の人差し指で軽く掻きながら続ける。

「あの山って、確かに迷いますよね？」

「そうだろう。でも、道を真っ直ぐ行ってあの樹にたどり着けた
」
「違いますよ」

望美の言葉を遮り、洋は両手をヒラヒラと振り、

「道を真っ直ぐ行ったんじゃないくて、森を真っ直ぐ行ったんです」
「森を……？」

「はい、道の上を歩いていたらたどり着けない。だったら、違うところを歩こうという考えに至りまして……その所為で木の枝や葉っぱとかが頭にくっついたりとかしましたけど」

軽い口調で、まるで当たり前の事を言うかのように話す洋。しかし、顔や手にある擦り傷などを見ていると如何に大変かどうかが分かる。洋の顔からも疲れの色が隠しきれずにいる。

「ふふ、面白いことをやるんだね洋くんは」

優しい口調で呟くように言った宗一は洋と望美の真ん中に座る。

そして、宗一は実はね、と言葉を始め、

「あの道を歩いてちゃ絶対に上にはたどり着けないんだよ」

「「えっ？」」

洋と望美の声がハモる。当たり前だろう。本当に宗一のだったらあの道の存在意義が見当たらない。

「えっ、お父さん、どいいう原理でたどり着けないようになっていくんですか？」

「簡単さ。結局あの道は最後には同じ場所に戻る仕組みになっているんだよ。だから、あれは言っちゃえば出口が無い迷路なんだ。だったらどうやって上にたどり着けばいい？ あの樹に向かって歩いていけばいいのさ。道に関係無くな。そうすればあの樹にたどり着くって訳。これはある意味発想の転換だ。マニュアル通りにしか動けない人間ではたどり着くことが出来ない山。それがあの山なのさ」

淡々と語る言葉を洋と望美は黙って聞く。

発想の転換。

洋自身がこれが出来たかと言われると首を傾げるだろう。実際には考えもせずただあの樹に突っ走っただけである。

だが、それが幸を制し今ここにいる。

望美は苦虫を噛み潰したような表情になっていて、何かを考えているようだった。

27

言いたいことを言い終わると宗一は顔を洋の方を向ける。
そして、一言。

「合格」

と。

洋は一瞬何を言っているか分からないと言わんばかりの表情になったが、どんどん明るい表情となっていく。

「こ、合格……っ、つまり……！」

「入門を許可するよ」

「……よっしやあああああああ！！」

疲れなんて吹っ飛んだとばかりに、心の底からの叫びが久遠寺家に響き渡る。

状況が全く掴めずにいる望美は宗一に聞く。

「あの、お父さん。その……洋って男を道場に通わせようとしているのですか？」

「うん、そうだけれど」

望美は目を十円玉久遠寺位の大きさまで開く。

心底驚いていた。

宗一が新たに道場に人を向かい入れるなんて望美にとって異質な感じだ。

望美は洋に恐る恐るに話しかける。

「えっと……」

「あ、よく考えると自己紹介していませんでしたね。俺は成田洋つています」

「そうか。成田、お前剣道していたことがあるのか？」

「……はい、小学生の頃に三年ほど……止めましたけど」「どうしてだ？」

「ウチの親父は小学校の教師でして、転勤してばかりだったので」「成る程……」

納得したようにうんうんと頷く望美。

一方洋の表情はどこか、悲しそうな切なそうな、そんな表情になっ

ていた。

ふう、と息を吐き、

「そういう事ですけど、道場に決めもいいですか？」

「……ああ、お父さんが決めたのなら」

「あ、ありがとうございます！ 絶対に望美さんの理想の男になってみせます！」

「……、」

洋は立ち上がり望美に近づき、望美の手を握りそう宣言した。望美はどうしていいかわからないのか、何とも言い難いような気持ちだ。

「モテモテだね。望美」

ニヤニヤと、普段の朗らかな笑みとはまた違う底意地の悪い笑みを浮かべながら茶化すように言う宗一。

茶化された望美は心底うんざりしたように息を吐く（ちなみに、この時に洋に握られた手は振り払われた）。

「茶化さないでください。別に恥ずかしがったりはしませんよ」

「完全に意識されてない……」

「あはは……同情するよ」

絶望に満ちた表情でうなだれる洋に宗一は肩にポンと置き同情する。ある意味、現在進行形で恋している人間しか分からない心の痛みだろう。

あっ、と宗一は何かを思い出したかのような声を上げる。

「もう夜遅い時間帯だけれど、大丈夫かい？」

その言葉を聞いた刹那、洋は少しだけ、本当に少しだけ眉間に皺を寄せ渋い色顔に出た。

洋は頭を掻きながら、自虐を言うような声色で話す。

「ええ、大丈夫です」

と、一言だけ、何かを言いただけな感じてあったが、それを全て押さえ込み、完結に答える。

洋は立ち上がり、

「あの、玄関はどこです？」

「ああ、玄関は居間を通って左の廊下を歩いた突き当たりにあるよ」「そうですか、ありがとうございます」

ぺこりと、礼儀正しく頭を久遠寺親子に下げ、

「では、明日からよろしくお願いします」

挨拶をし、洋は縁側を後にし玄関へと向かう。

「ふあゝ……何だか疲れたな」

欠伸をしながら玄関で二ヶ月位に購入した一九九八円の白と黒が入り混じった安物のスニーカーを履いている。

トントントン、とつま先を玄関に突きキチンと踵まで足を入れ、玄関に置いてあった学生鞆を背負うように持つと、

「さて、帰るか」

「ちょっと待つてくれないか？」

ふと後ろから声をかけられた。この声に反応するように振り向く。久遠寺望美がそこに立っていた。既に顔や唇は人間として普通の色に戻っていて、風呂上がりの色っぽさは抜けていた。

「はい、何ですか？」

「一つだけ聞かせてくれ。成田は、私をどうして好きになったんだ？ 私はお前とは初めて会っているんだぞ？ 好意を向けられるような事を行った記憶もない。なのに、どうして……」

「一目惚れ、ですかね」

恥ずかしがる事無く、堂々と洋は言い放った。鳩が豆鉄砲を食ったような表情になる望美。

「では、明日よろしくお願いします。望美さん」

もう一度ぺこりと頭を下げた洋はガラガラガラと引き戸を開け久遠寺家から出て行った。

「……げ、そうだった……忘れてた、階段」

目の前には、四〇段近い段がある石で出来た階段。疲れている身体にはちとキツイ。

「はぁ……」

憂鬱そうなため息をついた洋は階段という強敵と戦つたのだった。

第二話・合格（後書き）

感想など待っています

第三話・稽古始め

次の日。

学校を終わり洋はあの四〇段近い石段を歩き、久遠寺道場へと向かっていた。ここを歩くだけで多分ダイエットになるんじゃないかな？ と、どうでも良いような事を考えながら歩いていく。

そして、上までたどり着き、洋は道場の方に向かい、縁側から上に上がり、道場の襖を開けた。

道場はとても広く、左には神座に掛け軸が立て掛けられていて『精神一到』と書かれている。

竹刀掛けも神座の近くに置かれている。

洋は板張りの床を歩き、竹刀掛けがある所まで行き、七本ある内の一本を引き抜き、竹刀の状態を見た。

(……こりや凄いな)

柄の色から見て、竹刀の状態はボロボロになっていてもおかしくない筈なのに、竹刀はささくれも無い綺麗な状態になっていて、手入れの良さがよくわかる。

先ほどまでは気が付かなかったが、板張りの床もとても綺麗だ。埃一つも無い。掃除も隅から隅まで行き届いている。

「久々に素振りでもしてみるか」

制服の上着を脱ぎ、竹刀の柄を上には軽い力で右手、柄の先端には左手を添える。ふう、と小さく息を吐き、竹刀を頭の上まで上げ、

添えていた右手に力を入れ振り下ろす。

懐かしい。

今の洋の気持ちを表すならこれが一番合うだろう。小学二年生から五年生まで剣道をしていた時の事を思い出す。

「腰が入っていないな」

感傷に浸っていると道場内に女の子の声が聞こえた。

開いている襖を見ると、久遠寺望美が紺色の胴着と袴を着用して立っていた。

「手だけで振っているぞ。竹刀や刀は腰を入れて振るんだ」

「そうでしたね……あ、いつ帰ってきていたんですか？」

「さっきだ。それよりも早くこれに着替える」

「胴着と袴？ これ、誰のです？」

望美から渡された物は少し年季が入った胴着と袴。

紺色が何回も洗濯をしたのか少々脱色されていて、紺色というよりは青と言った方が良さだろう。

「お父さんの昔使っていた胴着らしい。私はこれを使った所を見たことは無いけど」

「へえ、そうなるかと本当に昔の物なのかもしれないですね」

「多分そうだろう。私は外に居るから早く着替えるんだぞ」

望美はそう言うつと襖を閉め外へと出て行った。

胴着と袴を渡された洋は言われた通りに胴着を着始める。

「では、稽古を始めるぞ」

着替えた後、洋は望美を呼びまず準備体操をしてから防具を着ける。四年前てはいえ、着方が身体で覚えていたのかスムーズに防具を着用出来た。

望美も防具を着用し、今に至る。

「はい、お願いします」

「……よし、行くぞ！」

初っ端本気モードの望美の竹刀を洋はギリギリに倒れ込むように避ける。

準備体操でそこそこ身体が温まっているとはいえ、いきなり面を狙ってくるとは予想外だった。

「どうした、早く立て」

「いきなり過ぎて吃驚した……最初は基礎稽古からなんじゃないですか？」

「お前は剣道経験者だろう。それに実践の中で経験を重ねるというのが久遠寺流だ」

んな滅茶苦茶だーっ！ と叫びたくなかったが、そんな暇も与えないとばかりに次の攻撃が洋に向かう。向かう先は再び面。洋は竹刀で受け止め、鏝迫り合いへと持ち込んだ。

「ほう、ブランクがあるとは思えないな」

「ええ、何となく身体が覚えているんですよ」

「そうか……はっ！」

洋の竹刀を払い、体勢が少し崩れた時、チャンスと見込んだ望美は竹刀を振り上げ、洋の面へと振り下げた。

バシッ！ と痛みがよくわかる音が鳴り響く。

「いったあゝ……奥に当たりましたよ！」

涙目で訴えるも望美はそれを完全スルー！

「まだまだ、稽古はこれからだ」

「……もう、どうにでもなれ！」

痛みを我慢し、洋は摺り足で望美に向かい、面を狙うも大振り、そして腕だけが前に行っていた所為か望美に軽くあしらわれ、背中に軽い衝撃が飛んできた。

「真剣だったら切られていたぞ」

「ぐっ……うおおおおおおお！！！」

男の雄叫びが道場を侵略する。

負けん気が混じった目を望美に向け、望美に近づくが、

「甘い！」

洋の勢いを逆に利用し突きを喰らわせた。突きは剣道の技の中でも危ない部類に入る技で、突きを間違え喉に竹刀の先端が刺さるといふ事も起きている。

しかし、望美の突きは見事に突き鐔を捉えていた。カウンターパンチを喰らった洋は少しよろけたが、体勢をあまり崩さず、次の攻撃に移る。

「うおおおおお！！」

雄叫びと共に何度も何度も望美に一本取ろうと頑張るが、完全に実力が違いすぎた。面を打とうとすれば防がれ面返し胴をされ、小手を狙えば竹刀を払われ面を打たれ、胴を狙えば突きが襲い掛かる。洋の攻撃は一度も当たらない。しかも望美はあまり本気を出していないようにも見えた。

「はあ、はあ、はあ……くそお……全然駄目だ。実力が違いすぎる」
「当たり前だ。成田より長く剣道を続けているんだ。当然だろう」

悔しいがその通りだ。

おそらくこれ以上続けても洋には勝ち目はないことは目に見えている。

洋は肩で息をしているのに比べ、望美は未だに隙の無い構えを続けているあたり、体力の面に関しても洋が不利であることも一目瞭然。それを感じた望美は隙の無い構えを解き、

「終わりだ」

一言、洋に告げた。

洋はポカンと気が抜けた感覚が走る。

「ええと、何ですか？ まだまだ俺はいけますよ！」

「いや、オーバーワークは身体に毒だからな。今日は始めの稽古だし、こんなものだろう」

正座し、面紐を解き手拭いを頭から外す。外すと綺麗な黒髪が露わになり、顔には健康的な汗が流れていた。望美は胴と垂れを外し、綺麗に畳む。ふと、洋に目を向け、

「……どうした？ 稽古は終わりだぞ？ 早く防具を外したらどうだ？」

「あ、はいっ！」

あたふたしながら洋は返事する。望美は怪訝な顔になるが、まあいいか、と襖を開け道場から出て行った。

洋は望美の微妙にはだけた胴着から見えた鎖骨やら出来物が一つもない肌に釘付けになっていたりしていた。

発育が良い望美の身体に興味津々なのは仕方がないと洋は自分に言い訳しながら胴着を脱いでいく。

少々短めのツンツン頭が少しだけペタンとなっている。ガシガシガシッ！ と手拭いの所為でペタンとなった焦げ茶色の髪がある程度まで戻す。だが、あまり効果は無い。

「とりあえず着替えるか」

袴の紐をヒュルヒュルヒュル、と解き上の胴着も脱ぐ。

胴着と袴を脱ぎ、道場の端っこに置いていた制服に着替え始めた。

「ふう、何だか疲れたな……」

呟きながら昔の記憶を辿りながら胴着と袴を畳む。意外と頭では何となくではあるがよく覚えているものだ。

辿々しくはあるが、胴着と袴を畳み、防具も畳み端っこに防具を置き、竹刀も仕舞い洋は学生鞆を背負い道場を出た。

縁側に座り、疲れた身体を休ませていると、

「あ た っ」

コツンと頭に何かが軽くぶつかった。

上を見ると、望美が五〇〇ミリリットルが入っているポカリスエットを渡してきていた。

「汗掻いた後は水分補給しないと脱水症状で倒れるぞ」

「どうもっす」

望美は私服に着替えていて、可愛い女の子の服ではなく、ボーイッシュな印象を受ける服装だった。

白いシャツに黒の上着を羽織り、クラッシュジーンズを履いたスタンス。男がこのファッションをしていても違和感は無いだろう。

しかし彼女はそれを着こなしていて、可愛い女の子ではなく格好いい女の子と称した方が合っているような気がする。

「……はあ」

「ん？ どうした、突然ため息をついて」

「さっきの稽古なんですけど、望美さんに手も足も出なかったなー、って思っています」

さっきの稽古では一本所か望美の防具にさえ全然当たらず、唯一当たったのは最初の鍔迫り合いで微かにカツカツと当たった位。

がっつきている洋に望美は慰めるわけでもなく本当のことを言い切った。

「当たり前だ。完全に続けてきた期間が違う。負けるのは当然だろう」

「ぐっ……」

何も言い返せない洋。

だがな、と望美は言葉を紡ぐ。

「根性は素直に凄いと思うぞ」

「へ？」

まさか褒められるなんて夢にも思っていなかった洋は声が裏返った。

「正直に言うと、最初にやった面でお前は諦めるのではないかと思っ
っていたんだ」

最初の面。

望美が初っ端本気モード全開で打ってきた面の事。

今思い出しても驚く事が出来ると思う。

「だが、諦める所か私に向かってきた。何回やられようと諦める事
なんて知らないように」

「昔から諦める事が好きじゃなくて……可能性が低かろうと相手に
向かってくる事が多かったですね。……その所為でしなくとも
いい怪我をよくしてきましたが」

自虐的に呟く洋。

そんな過去があり、無駄に打たれ強い身体が出来上がったのは感謝
するべき所なのかもしれない。

口にポカリスエットを流し込む。
乾いた喉や身体にポカリスエットが潤いを与え、喉と喉がくっ付く
ような感覚が薄れていく。

「この分なら多分お前は強くなると思う。根性がある男は……私は
好きだぞ」

「!?!」

洋の身体に電流が走る。右手に握っていた五〇〇ミリリットルのペ
ットボトルが小刻みに震えていた。

(まさか……! これは……デレなのか!?)

洋の思考が斜めの方向に逸れてゆく。

(つまり、『洋くん、君は強いわ! そんな洋くんは私だあいすき
』という事になるわけだ!)

斜め所か望美の言いたい事の一刻も理解していないようである。
フフン、と鼻を鳴らし、

「そんなツンデレの望美さんも……大好きだああああ!!」

「なっ! 抱きつこうとするんじゃないバカ者が!」

ゴソツ!! と鈍い音が洋の頭から聞こえた。

抱きつこうとした洋を望美は頭に拳骨を入れていたのだ。

「まったく、どこをどうなってその……『つんでれ』となるのか理解
しがたいな」

「……その様子だとあまりツンデレを理解していませんね」

「うむ、つんでれとか萌え……とかはよく分からん。去年学園祭のあるクラスでつんでれ喫茶をやっている、そこにいたウエイトレスは何だか不機嫌そうだったが……不機嫌になることがツンデレなのか？」

「違いますね。ツンデレって言うのはツンツンデレデレの略で、初めはツンツンして取っ付きにくい感じだけど、どんどんデレてくるのがツンデレです」

「……となると、成田は私をツンデレと言っていたが……ん？ おかしくないか？ 私はいつデレデレになった？」

ジドーっと不機嫌そうに洋の顔を見る。

何だか今日は望美の色々な表情が見えるなーっとはんわかした気持ちになる洋。

「それにな、私は成田にデレデレになる予定は金輪際無いし」

「いや、絶対にぜえったいに望美さんをデレさせて彼女にしてみせますー！」

「はいはい、期待してるぞ」

言葉とは裏腹に、望美は呆れるような口調になっていて、手をヒラヒラと振りながらどうでもいいと言わんばかりの声色でもある。

(……まあ、分かっていたけどね！ あんな展開(俺が妄想したやつ)はまだまだ先だと言うことはな……)

ガクンとうなだれる洋。

好感度で言えば、一〇〇パーセント中、二、三パーセント位しか好感度は無いだろう。

これは一方通行の恋だという事は理解出来ている。洋はそこまで頭は残念ではない。

だが、諦めたくない。

本気で、久遠寺望美という女の子を成田洋は好きなのだから。

「あ、そう言えば宗一さんに挨拶するのを忘れてた……望美さん、宗一さんは今どこに居ますかね？」

「お父さんは居ない」

「え？ あ、すみません……そんな事になっていただなんて……」

気まずい事を聞いてしまった後のように静かに言う洋に、望美は少し焦ったように、

「ち、違う！ そう言う家庭の事情があれだとかじゃない！ お父さんは放浪癖がある人だから、またに置き手紙を残してどこかに行くときがあるって事だ」

「ああ、なるほど……って放浪癖ってどこに行っているか分かっているんですか？」

「いや、『出掛けてくるねー』とだけ書かれていただけだから正確にどこに行っているかは把握していない」

意外とちゃらんぼらんなんだな、と洋は心の中で寸評した。若く見える朗らかな笑みを浮かべた優しそうなお父さん、というのが洋のイメージであった為、意外に厄介な癖を持つ宗一に抱いていたイメージが少し変化していた。

それ以前に、もし昨日この道場に来なかったら、宗一とは会えずに道場の入門も出来なかったかと思うと、自分はとても幸運ボーイだという事を理解するには時間はあまり必要では無かった。

「いつ帰ってくるかも分からないし……」

「え？ ってことは暫く望美さんは一人何ですか！？」

活き活きしながら望美に聞く洋。
望美は怪訝な顔で、

「そうだが……それがどうした？」

「こんな大きな家に一人は危ないですよ！　もしよかったら

「結構だ」

「俺が泊まる　　って、結論早すぎませんか！？　断るならせめ

て少しは考えてーっ！」

ぎゃあぎゃあ！　と騒ぐ洋に望美は額に剣道を嗜んでいるとは思えない女の子らしい指を当て、かつたるそつに答える。

「お前が居た方が危険な気がするからな。それに私は馴れているから問題はゼロだ」

「で、でも……」

「それに成田だって家族が居るだろう。心配されるんじゃないか？」

さつきまでテンションが高かった洋が沈む。

暗い表情がチラリと見えたが、望美は気が付かない。

アハハッ！　と明るく笑って見せ、

「確かにそうですね。では、せめて

学生靴を開け、シャープペンシルと授業で常に使用しているルーズリーフを一枚抜き取り、縁側の板を下敷きのように使い、サラサラサラッと英語やら数字やらを書いていく。

書き終わった洋はルーブリーフを望美に差し出した。

「……………？ 何だこれは？ 何かの暗号か？」

「違いますよ。俺のメールアドレスと電話番号です。何かあったらこの番号にかけてきてください。必ず駆けつけますから」

「……………」

では、また明日よろしくお願いします、と頭を下げて洋は縁側を立ち、石段を降りていく。

第三話・稽古始め（後書き）

感想など待っています。

第四話・それぞれの休み時間（前書き）

洋と望美って高校生なのに高校生活の描写を書いていなかった……
というわけで書いた話です。

何時もより短いです

第四話・それぞれの休み時間

成田洋は一年一組の生徒だ。

クラス総人数四〇人、男子二〇人女子二〇人のちょうど半分の割合だ。

私立桂瀬高校は生徒数四八〇人の一学年四クラス一六〇人で形成されている。

(はぁ……眠い)

先生の有り難い授業の話を聞き流しながら心の中で呟く。

今やっている授業は数学で、授業で今行っている所は所謂中学時代の復習であり、内容を殆どつかんでいる為、ただでさえつまらない授業が余計につまらなく感じる。

(……っ)

シャープペンシルを握った途端右手に痛みが走る。原因は分かっていた。昨日久遠寺道場を後にした後に自宅で竹刀を素振りしていたからだ。

正直洋はシヨックを受けていた。

あまりにも違いすぎる力の差に。

何としても追い付きたい。その一心で竹刀を素振りしまくった結果がこれだ。

彼の両手にはテーピングがぐるぐる巻きになっていて、綺麗に巻かれているのではなく、不規則に不格好な形で巻かれている。

少しだけグーパーするだけで少し痛みが走り抜けた。竹刀を握れない事は無いが、あまり無理はしたくない。

キーンコーンカーンコーン、と桂瀬高校内に無機質なチャイムが響き渡る。

「今日はここまで。昨日渡したプリントは週番の人集めて職員室に持ってきてください」

そう言つて数学教師は教室から出て行く。

プリント？ とシャーペンシルを置き首を傾げた。クラスメートの皆は週番の人にプリントを渡し始めている。

(プリント……？ ああ、あれね。はいはい)

ようやく思い出し、ガサガサ！ と机の中を調べ、見つけたものの教科書に前へ前へと押しつぶされていた所為か紙がくしゃくしゃになつていて、端っこが微妙に破れている。
勿論問題など手をつけちゃいない。

(ちやつちやと終わらせるか)

少しだけ痛む手を動かしプリントに答えを書いてゆく。中学生の復習のプリントの為、あまり時間を使うこともなく全て解き終わる。

「終わった？」

「え？」

不意に声をかけられ洋は上を向く。プリントの束を持ったスカイブルー色のセミロング位の髪をした女の子が洋の机の右隣に立っていた。どうやら彼女が週番らしい。

「ああ、ごめんごめん。はいプリント」
「ん。……」

彼女は洋の不格好に巻かれたテーピングに視線を下げていた。

「成田、あなた怪我でもしたの？」

「え？ ああ、これね。ちょっと昨日竹刀を振りすぎてね……」

いきなり呼び捨てかよ　と思っただが、その言葉を飲み込み事実を言う。

別に隠すことも誤魔化す理由もない。

「ふうん、剣道やってるんだ」

「昨日からだけだな」

「どこの道場に通っているの？」

随分とプライバシーな事を聞いてくるスカイブルー色の髪の彼女。もしかして俺に気があるのか？　と内心思ったがその考えと思考をゴミ箱に捨てる。

洋はあくまで久遠寺望美一筋の男だ。

「久遠寺道場って所だよ。知ってる？」

「久遠寺道場……」

プリントを腋に挟み、顎に手をやり何かを考える素振りを見せ始めた。

自分の記憶を確かめているのだろうか？

未だじっくり来ていないと表現された表情を洋に向け薄い唇を開く。

「分からないわ。この地域あんまり詳しくないし」

「え？ そうなの？」

「ええ、隣町から電車で通ってるから」

「へえ、そうなんだ」

もつと話が続きそうだったが、休み時間も無くなっていたのでとりあえず話はそこで終了し、スカイブルー色の髪をした女の子は机から離れていく。

机に頬杖をつき雲一つ無い快晴の景色を見ながら、

(確か……網倉雨子 あみくらあまこ ……だったかな)

網倉雨子。確かこんな名前だったような気がする。二日ほど前に行った自己紹介の時に名前を言っていたような気がするが、あの時には入学式の時に見た望美の姿が気になりすぎてよく聞いていなかったりしていた。

頭部を右の人差し指で掻きながら洋は大あくびをかまし、放課後の稽古に向けて体力を温存するべくうつぶせ寝をし始めた。

「ねえねえ、あの男の子とどうなったの？」

二年二組にて。

久遠寺望美は友人である柴田響乃　しばたきよの　にある事を聞かれていた。

あの男の子？　と望美は考えるが最近久遠寺道場に通い始めた焦げ茶色の短めのツンツンとした髪型の男の子が頭の中に浮かびため息をつき、好奇心一〇〇パーセントなキラキラとした目を少し睨みつけるように、

「どうか……別に何もないが」

「えーっ、せつかくあの可愛い男の子……成田洋くん、だっけ？の背中を押してあげたのになー。成田くんはヘタレなのかな？」

可愛い、という単語に望美は頭の上に『???』を浮かべた。

響乃は男好きな所があり、彼氏に関してもくつついたかと思えば別れ、そして違う男とくつついていたり、世間一般で言う肉食女子なのだ。

真逆とも言えるタイプの望美は何でこんな別れたりするのだろうか？と疑問に思っていたりする。

「ヘタレ……ね」

いきなり襲ってくるような男より時期を考え、きちんとした男の方が望美は好みだったりする。

価値観の齟齬が生じているみたいだ。

「はあ、どこかにイケメンでも落ちてないかなーっ」

「落ちてるって……犬や猫じゃないんだから」

椅子を揺りかこのように揺らしながら二年二組を見渡す。そしてた

め息をつく。どうやらめぼしい男が居なかったようだ。

「強いて……アイツ位？」

「アイツ？」

響乃の指差す方向の先には右耳にピアスをし、髪も染髪しているのか茶色い髪は旋毛辺りは黒い髪が出始めている。

鷺津元春。

イケメンという訳ではないが、ワイルドな雰囲気身を纏っていて、いかにも不良という風貌。相変わらず趣味が悪い、と酷評をした。

「……………」

望美は鷺津元春の顔を見る。

むっとり顔でとても不機嫌そうな、誰も寄せ付けさせない一匹狼。事実、望美は同じクラスメイトだと言うのに鷺津元春が誰かと会話したりした所を見たことがない。声だって必要最低限だけ。

「なにににー？　じーっと鷺津元春の方なんて見て。もしかして望美は不良のようなタイプが好きなの？」

ニヤニヤと茶化すような声色で望美に言う響乃。それに対して望美は人差し指で頭部を軽く掻き、

「違っつて……………」

「ああ、望美には成田くんが居るもんね」

「もっと違う！」

照れ隠しではなく、心の底からの否定。

これを聞いたら焦げ茶色のツンツン頭の少年は泣いてしまっただろう。

キーンコーンカーンコーン、とチャイムが鳴り響き、響乃は自分の席に戻っていく。

（さて、英語か……）

ガクンと肩を落とす。

望美は基本的に優等生であり、成績も良い。

……英語を除けば。

これから始まる地獄の五〇分間に望美は果てしなく憂鬱な気分になった。

第四話・それぞれの休み時間（後書き）

感想など待っています

第五話・道場破り（前書き）

戦闘描写はこんな感じかな……こういう風にした方がよくな？
みたいなのがあったら教えてください
み

第五話・道場破り

「うおおおおおおお!!」

「甘い!」

久遠寺道場にて、男の雄叫びと女の凜とした声が響き渡る。

男、成田洋がこの久遠寺道場に入門して一週間が経過した。相変わらず洋は望美にしごかれるという日々。昔に剣道をかじっていた事があるといつてもブランクがあり、相手の望美は十年単位で剣道を嗜み続けているため、手も足もでないのは仕方無い事ではあるが。

一週間前より洋の動きは格段に良くなっていた。洋の自主練習や一週間望美にしばかれ続けた結果、面の打ち方やフェイントなどが上達していく。

洋と望美は道場の真ん中に竹刀を構え一定の距離を保ちながら、相手に隙を伺っている。

「……………」

「……………」

先に動いたのは望美。

洋の竹刀を軽く払い間合いへと入ってゆく。しかし洋はそれを狙っていたのか払われた刹那、素早く竹刀を振り上げ、望美の面を狙う。

望美は防ぎに入り、竹刀を横に置き面を守りに入る。

(貰った!)

「突き！」

「……っ！」

竹刀を戻し、がら空きとなった突きへ竹刀が吸い込まれるように突き刺さる。

「……今日はこちらまでだな」

ふう、と一息つき望美は洋に言う。

息を切らしながら洋は立ち上がり、防具を外していく。

「はあ……」

「？ どうした？ ため息なんてついて」

「最後の小手何ですけど、なかなかいい感じだったのになーって思っただけですけど」

「確かに悪くは無かった。私も一瞬危ないと思ったからな。でも、少し露骨すぎた所があった。もうちょっと動きを小さくすれば行けたかもしれない」

「動きを小さく……か」

無駄に動きが多いことは自分自身でも理解しているつもりだ。ガシガシガシ！ と短めの焦げ茶色のツンツン頭が搔く。

「そう言えば宗一さん帰ってきませんね」

「そうだな……どこ放浪しているんだか……」

一週間前から久遠寺望美の父、久遠寺宗一はどこかへと行ってしまっていた。音沙汰も無く、生きているかも不明。

次は何時会えるのだろうかと他人事のように洋が考えていると、

「たのもーっ!!」

「な、なんだっ!? 宗一さんが帰ってきたのか!？」

「いや、お父さんはこんな野太い声してないって……」

溜め息混じりの疲れたような声。

では、この声は一体？

ドンツ!! と道場の襖が吹き飛ばされた。

ギョツとなりながら襖の方を見ると体格が良い坊主頭の男が柔道着を着用し元あつた襖の場所に拳を突き出していた。

どうやら襖を正拳突きで吹っ飛ばしたようだ。

「お前は？」

「そうだな……道場破りと言っておこうか」

冷静な態度を崩さず望美は坊主頭の男に問いかけた。

(道場破りって……現実に居たんだ)

道場破りという存在はアニメや漫画の世界でしか存在しない空想の存在だと思っていた洋にとって色んな意味で驚きである。

「道場破り……お前はどこの道場に入門している？」

「網倉道場……といつても分からないか」

「網倉？」

坊主頭の男の言葉に洋が反応の色を見る。

望美と坊主頭の男の視線が洋に直撃した。

しかし洋はそれに気が付く様子もなく、考え事に没頭中。

網倉雨子。

彼女の顔が洋の頭の中に浮かび上がる。

これは偶然なのか？

網倉雨子は武道をしているようには見えなかった。網倉という名字はあまり聞かないが、全国探せば結構な数字になるはずだ。おそらくただ名字が被っているだけだろう、と自己完結させる。

「どうした成田？」

「あ、いえ、何でもないです。アハハ……」

手を頭の後ろにやり乾いた笑い声を上げる。
首を横に捻りながら怪訝な顔をする望美。

「網倉道場門下生として、久遠寺道場の看板を貰い受ける！」

「ふん、私を倒したら構わん」

不適な笑みを浮かべ、望美は竹刀を握りしめ、坊主頭の男へ剣先を向け、坊主頭の男は拳を握りしめ何時でも攻撃できる体勢をとる。

「待ってください」

「……？」

望美の前に横から竹刀が乱入する。その竹刀は洋が使用している物だ。

「何のつもりだ？」

「望美さんがわざわざ手を煩わせる必要はありませんよ。あんなドラマの脇役Cのような奴なら俺で充分です」

「わ、脇役C……だと？」

坊主頭の男はこめかみに青筋が浮き出てきている。しかし洋は気づく気配も無く、

「だが、お前では……」

「問題ありません。一週間望美さんにしごかれた結果をここで見せてやりますよ」

洋は笑っていた。自信に満ちた、そんな笑み。望美は少し溜め息をつき、竹刀を下ろす。

「わかった。お前に任せる。頑張れよ」

「はい！ 頑張ります！」

さっきの笑みとはまた違う緩みきったニヤケ面になる洋。こんなんで大丈夫か？ と心配になる。

「さて、俺がアンタの相手だ」

「馬鹿にした分、絶対ぶっ飛ばしてやる！」

坊主頭の男の殺気はハンパないレベルに足していた。あの脇役C言が原因だと言うことを洋は知る由もない。

洋は剣道でやるような構えはしない。右手だけで竹刀を持ち、基礎まで完全に無視した構え。

「行くぞ！」

まず駆け出したのは洋だ。洋はダッシュで坊主頭の男に向かい、相手の懐へ入ろうとするが、

バキッ！！ と坊主頭の男の拳が洋の顔面に真っ直ぐ直撃した。

「え？」

望美と坊主頭の男の声が見事にシンク口する。

坊主頭の男は『え？ え？ どうなった？ あれ？』と呟いている。

望美も望美でキョトンとした表情になり、この状況を理解できずにいる。

「いでで……やるなお前……」

良い勝負を繰り広げたかのような雰囲気醸し出しながら呟く洋。だが、坊主頭の男は『イヤイヤ』と手を右に左へ振って否定した。

「くそっ……頭がグラングランする……」

殴られた箇所を抑えながらフラフラと立ち上がるが、

「……行くぜ！」

坊主頭の男は間を一気に縮め、拳を振り上げ洋の顔へと降りかかる。

ゴソッ！！ と骨と骨がぶつかる音。

脳内が揺さぶられ、一瞬だけ視界が真っ暗になり、洋は頭を振り気をしっかり持たせ坊主頭の男の顔をキツと見た。

歯を食いしばり、竹刀を相手の胸元へ突き刺そうて動くが、

「おせえ！！！」

「おわっ！！」

ささくれが全くない竹刀を片手で掴まれると、竹刀ごと洋の身体は飛ばされ、道場の床に数回叩きつけられ、道場の壁にぶつかり、洋の身体は止まる。

口から大量の酸素が吐き出され、ゲホゲホとむせた。

「成田！！」

「ゲホ……だ、大丈夫です。問題はないです」

道場の壁を背中に付けながらゆっくりと立ち上がる。

少し呼吸を整え、洋は走る。何時でも攻撃できる体勢の坊主頭の男

下品な笑い声を道場内に鳴り響かせる坊主頭の男。

「…………ぐっ」

かなり打たれ強い身体を持つ洋は力弱く立ち上がり、坊主頭の男の隣をフラフラと歩く。

坊主頭の男は洋を今すぐ倒すことも容易い事であるが、あえてそれを見送る。

「望美さん……………」

「…………よく頑張った。後は任せておけ」

望美は洋の心情を見抜いたのか、洋の肩をポンと軽く叩き、擦れ違うように望美は坊主頭の男へ向かう。

「…………頑張ってください……………」

洋は今まで蓄積されたダメージが一気に爆発したのか、膝から崩れ落ちその場に倒れ込む。

「……………」

「次はてめえだな。てめえが倒されたら看板は貰っていくぜ」

「…………良いからかかってこい」

その言葉が坊主頭の男の表情を消すことになり、再び構えに入った。

「てめえもあの男のように」

「

全てを言い切る前に、坊主頭の男の腹部の真ん中の小さなへこみ、

つまり臍に望美が持っていた竹刀の先が突き刺さり、坊主頭の男は自分が入っていた入り口を通り過ぎ久遠寺道場の庭を何バウンドしながら吹き飛ばされる。

坊主頭の男は一撃で意識を刈り取られたのか、ピクリとも動かない。

「……ふん。女が男より弱い時代なんてとつくの昔に終わっているんだ」

鼻を鳴らし、望美は倒れ込んでいる洋を背負い居間へと足を運んだ。

第五話・道場破り（後書き）

感想待ってます

第六話・電話

「いやあ、面目ないです」

久遠寺家の居間で洋は目を覚ます。

時計を見ると二時間ほど気絶していたようだ。

その後、望美に自分が気絶した後の話しを訊いて洋は頭部を申し訳無さそうに搔く。

望美はフツと小さく溜め息を吐き洋の寝ていた隣に正座する。

「そんな事はない。成田はよく頑張った。まあ、まだまだ実力不足な面も多いが」

「アハハ……あ、そう言えばあの坊主頭の男はどこに行っただんです？」

話しによるとあの道場破りに来た坊主頭の男は望美に一撃で庭まで吹っ飛ばしたというが、居間から庭を見るが、あの暑苦しい坊主頭の男は影も形も無かった。

「捨ててきた」

「捨ててきた!？」

「石段の下にな。まあ、そろそろ起きても良い時間だと思う。上に上がってこない所を見ると多分帰ったんじゃないか？」

「そ、そうですか……」

小さく、弱く笑ってみせるが洋はすぐに笑顔が崩れ下に俯く。

悔しかった。

あの坊主頭の男に手も足も出なかった。

あの時の光景が未だに脳内再生され、洋の負けん気を攪る。自分からすっかけたケンカで一方的にやられるなんてあまりにも格好悪すぎる。

こんなんでは望美と付き合える所か望美の強さまでたどり着けるか分からない。

下唇を噛みながら洋は眉間に皺を寄せた。何時もの柔らかい雰囲気
が完全に抜け、かなり険しい表情へと成っていた。

その様子に気付いたのか望美は怪訝な表情を浮かべながら、

「……別に気にすること無い」

「え？」

「負けることは悪い事じゃない。大切なのは勝敗よりも気持ち。お前は最後まで気持ちが折れずに立ち向かったんだ。それは良いことだと思う」

「でも、結局は……」

「だったら稽古をして強くなればいい。負けたくないと思うのなら」

望美の言葉が心に突き刺さる。同情ではなく、本当に思っていることを彼女は洋に語っているのだ。

負けたくない。

勝ちたい。

そんな負けん気が洋の気持ちを高ぶらせる。

グワツと洋は立ち上がり、

「稽古、していただけませんか？」

望美の目を真っ直ぐに見据えながら、力強く言う。洋の中にある闘争本能を感じ取ることは望美にとって難しいことではない。

だが、

「前にも言ったがオーバークは身体に毒だ。今日は家に帰ってゆつくりする方がいい」

「で、でも……」

「それにお前は怪我をしているしな。幸いにも殴られた箇所は骨に異常は見当たらなかったし……怪我が治るまで稽古を止めておいた方がいいかもしれないな」

「そ、そんな……！ それじゃ身体が鈍って余計に弱くなるじゃないですか！」

「勘違いするな。稽古はしないが、体力作りをやるうと思ってる」「体力作り？」

「ああ、まあただ走って汗をかけばいい。家にはちょうどいいものもあるしな」

洋から視線を外し、庭に視線を移す。

嫌な予感を感じ取りながら洋は恐る恐る後ろを振り返った。

やっぱりかーっ！ と心の中で叫びながら洋は望美に提案する。

「あのー、やっぱり身体が万全になるまで絶対安静を貫いた方がいいと俺は思うのですが……」

「いやいや、稽古は無理でも走るくらいは出来るだろう？」

「でもお……あの石段を走るなんてイヤだアアア！」

必死の叫びが久遠寺家の居間に響き渡る。

石段は約四〇段近いあり、走ったりすればなかなかの運動量になるし、体力もかなり付くはずだ。

「お前に足りないのは技術以前に体力だ。根性だけは一丁前にある癖に体力が無さ過ぎる。よく考えると基礎体力を上げてから稽古するべきだったか……」

顎に手を当て一人言をブツブツと呟くが洋には途中までしか耳に届かなかった。

すると、居間にジリジリジリッ！ と機械音が鳴り響いた。

「む、電話か」

望美は立ち上がり、廊下へと繋がっている通り道の隣にある電話台の上に置いてある今時珍しいダイヤル式の黒電話の受話器を取り耳に近づける。

「はい、もしもし久遠寺です」

『もしもしー、お父さんだよ』

めちゃくちゃ軽いノリが受話器の先から聞こえてきた。

何とも言えない表情から、少し遠い洋まで聞こえるくらいの大きな溜め息を吐いた。

「お父さん、今どこにいるんです？」

『友人の所』

簡潔かつとても分かり易い理由を言う父、久遠寺宗一。これ以上訊いても疲れるだけだと判断した望美は、

「それで、どうして今日になっていきなり電話を？」

『うん、ちよつと悪い噂を訊いて』

「悪い噂？」

『うん、最近永瀬市で道場破りが多発しているんだ』

「永瀬市で？」

永瀬市。

洋達が住んでいる桂瀬市から一駅離れた市であり、桂瀬高校に通う学生の中には永瀬市からわざわざ電車で通う生徒も少なくはない。望美の友人でもある柴田響乃も永瀬市から桂瀬高校に通っている。

『そう、しかも道場破りはみんな網倉道場の人間みたいなんだ』

「確かにそうでした。久遠寺道場にも網倉道場の門下生と思われる男が来ましたよ」

『それで？』

「問題はありません。撃退しました」

『そっか、怪我とかしなかった？』

「ちよつと成田が……」

『洋くんが……？ 彼が戦ったのかい？』

「はい、でも負けてしまいましたけど」

チラリと洋の顔を見た。話題の張本人は勿論何の話しをしているのかわからないため、洋は首を横に傾かせている。

『仕方ないよ。彼はまだまだ実力不足だからね』

「……、」

『でも、彼にはなかなか面白い才能がある。そうだろうか？』

望美は黙って父の言葉に耳を傾ける。

宗一の声色は軽い部分もあるが説得力も備えた、そんな声。

『僕が言いたいのはいくらいだ。近い内に帰るから。それまで留守番よろしくね』

「……………わかりました」

と返事すると電話が切れ、無機質な電子音が受話器の向こうから聞こえてきたのを確認し、望美は受話器を電話の上に乗せる。

「宗一さんからですか？」

「ああ、近い内に帰ってくるらしい」

「そうですか……………」

ふと時計を見た。

現在時刻は六時二分。空は暗くなり始めていて、門限がある子供ならもう帰宅しているだろう。

「さて、今日はお暇させていただきましたね。明日もよろしくお願ひします」

「ああ、気を付けて帰るんだぞ」

洋はムクツと立ち上がり、玄関へと向かい安物の靴を少し乱暴に履き久遠寺家を後にした。

第六話・電話（後書き）

感想など待っています

第七話・函時の出来事（前書き）

明けましておめでとございませう！
今年もよろしくお願いしまーす

第七話・雨時の出来事

久遠寺道場に道場破りがやってきた次の日は晴れだった。これ以上ない位の快晴で、花粉症の方には辛い日となるだろう。

現に洋のクラスメートの中にはくしゃみを連発している人も居たり、ズビーツと鼻をかんでいる人も居る。花粉症の辛さを知らない洋は『辛そうだなー』つとめちやくちや他人事のように適当な感想を持っていった。

今の時間は昼休み。

弁当をつついたり、休み時間になった瞬間に猛ダツシユで食堂に向かったクラスメートもいたり、過ごす方法は様々だ。

洋はと言うと、今日の朝に購入したココア味のカロリーメイトを食べていた。

「つーかさ、そんなんで腹膨れんの？」

「飯つてのは必要なエネルギーを摂取するために行う行動だ。慶二みたいにバクバク食べるのは身体に悪いぞ」

古宮慶二　ふるみやけいじ。

クルクルとした寝癖とも捉えられてもおかしくない位の黒髪天然パーマ。洋の中学三年生からの友人で、よく話しをしたりする真柄だ。

「若いから別にいいんだよ。爺臭い事言っんじゃねえよ」

「身体は大切にされた方がいいぜ？」

「お前に言われたくねーよ！」

ビシツと使い捨ての割り箸を洋の顔を指す。

洋の顔に限らずの事だが、昨日道場破りの坊主頭の男にボコボコにされた傷を隠すかのように包帯がグルグル巻きにされていて、顔以外にも手や足にも包帯が巻かれていたりする。別にそこまでの怪我ではないのだが、顔に関しては相応の耐用であり、顔面に同じ箇所をぶん殴られて全然痛みが引かず、湿布を貼り剥がれないように包帯を巻いている。

見た目は病院に入院していても違和感が無いかなりの重傷患者さんであり、そんな男に身体が云々言われたくないのは当然だ。

「お前の方が身体を気を使った方が良いとわたくし古宮慶二さんは
そう思う」

「気は使ってるんだけどな……いでっ」

「ん、大丈夫か？」

「ああ、大丈夫だよ」

今の痛みは怪我の所為ではなく、最近の激しい運動（望美の稽古）
から来ている筋肉痛。

剣道を再び始める前はあまり運動をしておらず、今までサボっていたツケが襲いかかっていた。

「しかし真面目な話さ、どうしたんだよその傷。しかも最近すぐさま
帰るし」

「この傷は階段から転けて怪我しちまったんだ。最近ちょっと習い
事をな……」

「階段から転けたあ？ アハハハハ！ 洋は馬鹿だなあ！」

口調が限りなく感に障る。

イラツと来た洋は笑っている慶二の弁当から冷凍食品の鶏肉の唐揚げを全て取り口の中へと入れた。

慶二はギョツとした顔になり、

「あーっ！ 最後に残しておいた唐揚げを！ 洋てめえ、覚悟は出来てんだろつな！！」

「別にいいじゃん唐揚げ位。小さい男だな」

「三個も取る意味だろ！ ……くらえ」

チヨンと、慶二は洋の腕を突つついた。

「いつてええええ！！ て、てめえ！ 筋肉痛の所つつくんじゃない！！」

「はっ！ 俺の唐揚げを取られた痛みに比べたらそんなの屁でもないわ！ くらえっ！！」

「うおお！ 止める！ マジで痛いんだから！！」

騒がしく二人の昼休みが無くなっていく。

「……………」

成田洋は下駄箱の入り口で立ちすくんでいた。

昼休みは天気快晴だったはず。だが、今はどうだ？ ゲリラ豪雨にも勝るにも劣らない雨が降っていた。もちろん傘などは無く、洋以外にもその場で待機せざるおえない生徒も少なからずいる。

さて、と洋はこれからどうするかを考える。

何時もなら道場に行き強くなるために稽古をするのだが、今日は生憎の雨であり、望美は体力作りが云々と言っていたが、今日は走ったりすることは明らかに無理だ。

だが、無断にサボるわけにもいかない。

と、

「あら、成田くんじゃない」

「ん？ 網倉か」

後ろにはスカイブルー色のセミロングの髪が特徴的な少女、網倉雨子だ。

雨子も傘を持っていないのか、下駄箱の入り口から動く気は無いように見える。

「ねえ、その傷どうしたの？」

「あゝ……、家の階段から転げ落ちたんだよ」

「ふふふ、馬鹿ね」

一刀両断だった。

手を口元に当て、上品そうに笑みを浮かべる。

ガクンと肩を落とす洋。

本当のことを言ってしまうおつかとも思ったが、どうせ信じるわけないだろうな、と結論付けた。

「笑うなよ。めちゃうくちゃ痛いんだぞ」
「ふうん、こことか？」

ツン、と雨子の人差し指は確実に洋の筋肉痛を起こしている二の腕へ向かう。

「いったあああ!!」

「そんなに痛いのか？」

「当たり前じゃ！痛くて適わんわ！」

「口調が変よ成田くん」

愉快そうに笑う雨子とは真逆に泣きそうになる洋。

「ったく……網倉ってそんなキャラだったのか……？」

「あなたがどんな風私を見ていたかは知らないけど勝手にキャラ設定を作らないでくれる？」

「じゃあどんなキャラなんだよ」

「そうね……こんな感じかしら？」

雨子は一瞬下を向いたかと思えば、洋に向けて顔を向ける。そこには目に光が無い見るだけで恐ろしい目になっていた。

「うおおあ！ な、なんでよりもよってヤンデレなんだよ!?!?
っ！か器用だなお前……」

「ヤンデレならキャラ設定がきちんとしているし、評価が別れるキヤラになりそうだけれど、なかなかの人気キヤラになれると思って」
「人気考えてんのか……」

「当たり前じゃない。一発キヤラにだけはなりたくないもの」
「確かに一発キヤラにはなあ……」

「あなたは大丈夫よ。主人公だもの」

「主人公！？俺って主人公だったの!？」

「でも主人公も死ぬ漫画も少なからずあるし……あなた死ぬんじゃない？」

「何でだ！勝手にキャラ設定されて死亡宣言されるなんて……！」

悔しそうに拳を握りしめ、眉間に皺を寄せる。

雨子といえば、軽く微笑しているだけであり、洋との会話を楽しんでいるようにも見える。

「あら、すっかり雨が病んでるわ」

「何故雨がヤンデレ化してるんだ。それ以前にどうして俺はこの日本語の誤差に気が付けたんだろう……」

あれ？ どうして？ と頭を悩ませる洋を特に気にもせず、雨子は洋に話しかける。

「じゃあ、電車で遅れるから。また明日」

「あ、ああ。じゃあな……」

一、二回手を振り洋に背中を向け昇降口を出て校門を抜けていく。

(……ん？ 電車?)

奥歯に何か引つ掛かったような、すつきりしない気分になる。

昨日久遠寺道場に来た坊主頭の男は網倉道場の門下生。

網倉道場は隣の永瀬市にあり、そこから電車で桂瀬高校に通う生徒も少なからず居り、網倉雨子もその一人なのだろうか？

(……網倉道場、電車、網倉雨子……っていかんいかん！ 網倉が

武道をしているとは思えないし………むう)

顎に手をやり物事を考える仕草を見せる。

(……まあいつか。さて、早く久遠寺道場に行くかな)

疑問点を全て脳内のゴミ箱に捨て、昇降口を出て行く。

第七話・雨時の出来事（後書き）

感想など待っています

第八話・二人の襲撃者

雨が止み、洋はいつも通り久遠寺道場に向かう。

ハア、ハアと息を切らしながら石段を登っていき、何とか久遠寺家の庭に辿り着く。

洋は真つ直ぐ道場へと歩いていき、縁側の下にある石段の上に靴を綺麗に脱ぎ捨て襖（昨日の襲撃によって壊れた襖は直されていた）を開ける。

「あれ？ 望美さんはまだ帰ってきてないのか」

道場には黒髪ポニーテール少女は居なかった。
多分まだ学校にいるのかもしれない。

そんな事を考えていると制服のズボンのポケットに入っていた携帯電話がブーブーとバイブが鳴った。

「お……誰からだ？」

携帯電話を取り出し、確認すると、

『久遠寺望美』

心が跳ね上がった。

妙にテンションが上がった状態でメールを確認をし始めた。

タイトル：すまない

本文：かいものをしとくる、さきにじゅんひたいそうしておいてくへ
「……………」

望美はメールが苦手なようだ。誤字脱字が少しあるし、漢字変換が出来ていない。

携帯電話を持ってメールを打つのを悪戦苦闘している望美が頭の中に浮かび、何となくほのぼのした気分になる。

「可愛いなあ望美さん……………」

太い方のマツキーで横線書いたような目になりながら和む洋。

「あら、彼女から？」

「いやあ、まだ彼女じゃないよ。でも、最終的には彼女になって結婚……………なんてな、あは！」

「ベタ惚れなのね」

「うん、そうだよ」

「……………そろそろ私の存在に突っ込んでくれないかしら？」

「へ……………？」

後ろを振り返ると、ここにいるのがおかしい人間がそこにいた。スカイブルー色のセミロング。

そして洋のクラスメートにして委員長、網倉雨子がそこにいた。

「……………」
「……………」

空気が変わった。

ほのぼのした空気が変な空気になっていき、洋と雨子は……………正確に

言つと洋はキョトンとした表情で雨子を見つめて、数秒後に口を開く。

「うわああああ！ あ、ああああ、網倉！？ え？ なんで網倉っちがここにいらっしやるのでござえますか！？」

「敬語が滅茶苦茶な上に『ぜえ』の部分の発音が果てしなくウザいわ成田くん」

腰が抜け、道場の床に尻餅をつく。

気が付かなかった。

それほど洋の意識は妄想の中に入っていたらしい。

冷静に全て処理をした雨子はスツと手を差し伸べ、

「立てる？」

「あ、ああ。すまん」

雨子の手を握り、立ち上がる。

「さて……訊きたいことが山ほどあるわけだが。よろしいか？」

「ええ、何かしら？」

「何で居んの？」

まずはこの疑問。

彼女は一度家に帰ったのではないのか？

網倉雨子の服装は制服のままだし、まさかと洋は一つの結論に辿り着く。洋は恐る恐ると辿り着いた結論を雨子にぶつけた。

「……ストーカー？」

「違つわ」

「まさか網倉は俺のことを……？ いや、お前の気持ちは嬉しいが俺には望美さんという好きな人が居るんだ。すまない網倉。お前の気持ちには応えられない」

「なぜ私が何も言っていないのにつられていいのかしら？ しかも私はストーリーカーじゃないし」

洋の結論を全否定をする雨子。あまりにもひどい妄想に雨子は完全に呆れた表情を表していた。

「じゃあ、どうして？」

「決まってるじゃない」

雨子は目を閉じ、小さく笑みを浮かべながらこう言った。

「久遠寺道場の看板を貰う為よ」

時間は遡る。

「はあ……」

久遠寺望美は携帯電話を握りしめ溜め息をついた。
デジタル系の物は望美にとって強敵以外の何者でもない。
あのメールを打つのに両手を使って打つたのだ。

「稽古より疲れたな……」

買い物袋を肩に掛けながら望美は商店街を歩く。商店街はなかなか賑わっており、この市に住む人間は大体この商店街を使用するためだ。

（買い忘れは……無いな）

買い物袋に目を向けながら確認する。

中には大根、ウズラの卵、昆布、こんにゃく、スジ肉、ちくわ、が
んもどき、しらたきが入っている。おでんの具材だ。

おでんと言えば冬のイメージが強いが、コンビニエンスストアでは
おでんは春夏秋冬、四季に渡り売られている場所もあり、別に春食
べてもおかしくはない。

保存も効くし、お腹も膨れるという最高の手頃料理だと望美は思っ
ているのだ。

商店街のアーケードを抜けた望美は少し機嫌が良いのか鼻歌交じり
に帰路を歩く。

（まあ、アイツはいつも頑張ってるしな。たまにはご馳走でもして
やろうかな）

そんな事を考えながら歩いていると桂瀬公園の近くを通りかかった。

桂瀬公園は通常の公園とはまた違う公園だったりする。

鉄棒に砂場、雲梯や滑り台などの遊具などもあるが、公園の入り口を真つ直ぐ歩いた所には少し小さめの平屋がある。

窓は割られ、最早廃墟となっているがあの平屋は小学生達の秘密基地のような役割も果たしていて、市にしたっても取り壊す事もしないらしい。

「久遠寺望美、だよな」

「！」

えっ？ と声が出た方に身体を向ける。

声が出た方には鉄棒に座った金髪をオールバックにしているが、前髪は数本ほど垂れ下がっていている少年がいた。

体格は成田洋より細身に見えていて、黒いカーディガンのボタンを外しているという着崩した格好をしている。

恐らく高校生だろう、と望美は思ったのだが、金髪の男は煙草を吸っている。

しかし、服装に関しては制服には見えない。

多分未成年喫煙者なのかもしれない。

望美は無意識的に身構え、金髪の男を睨み付けるように、

「……………誰だ？」

「そう身構えるなよ。ちょっと話しても思っつてよ」

煙草を鉄棒の下に落とし、金髪の男は鉄棒から降り、まだ着火している煙草を踏み潰す。

「……………誰だと言っている。答える」

「そうだな……………こう答えた方がお前にとって知っていると思っつ」

「さつさと答える！」

「わかった。『網倉八雲』だと言えば分かるかもな」

「網倉……！まさかお前……」

「お前の考えは当たっているぜ。昨日久遠寺道場に来た男はウチの門下生だ」

望美は歯を食いしばる。相手は自分の家の道場の看板を取りに来た道場の親玉とも言える人物が近くにいます。気を緩める訳にはいきません。

しかし網倉八雲は対照的に笑みを浮かべていた。恐怖心を煽るような不気味な笑み。それが望美の不快指数を上げていく。

「……何しにきた？」

「答えは分かっているだろ？」

確かにこれは不問だったと思う。

昨日の道場破りに網倉を姓氏にしている男。

だったらやろうとしていることは分かり切っているじゃないか。

「俺はな、」

網倉八雲は鉄棒の端と端を握りしめ、

「久遠寺を、」

ガギンツ！！と鉄棒を身体の方に引き壊した。

鉄棒は遊具ではなく、ただの鉄の棒と成ったと同時に人を殺められる武器に成り上がった。

ギョツとした表情でその光景を見つめる望美。

あの細身の身体はどこにあんなパワーがあるというんだ？ インナーマッスルがどうたらなんてレベルを完全に飛び越えてしまっている。

改めて感じた。

この金髪の男は、昨日の坊主頭の男なんて比べ物にならない位の実力者だということを。

「壊しにきた」

静かにそう告げた。

第八話・二人の襲撃者（後書き）

感想や評価などお待ちしています

第九話・成田洋VS網倉雨子（前書き）

なんか洋って全然主人公らしくない気がするな……
気のせいかな？

第九話・成田洋VS網倉雨子

「どう言うことだ……」

重い口調で洋は雨子に確かめる。

まさかの事だ。網倉雨子という女の子が久遠寺道場の看板を狙っている。

(……昨日の坊主頭の男と間違い無く関係あるな……クソッ！)

心の中で舌打ちする。

今の洋は全快ではない。身体中を怪我しているし、筋肉痛もひどい。ただでさえ実力不足だというのに怪我をしているのでは話にならない。

「言葉の通りよ。私は網倉道場の娘。網倉道場の人間として私はあなたに宣戦布告するわ。あなたを倒して看板を貰う」

「……俺を倒す……、それが出来るのか？」

「当たり前よ。勝算が無くて攻めるわけじゃない。……行くわよ」

瞬間、網倉雨子は制服の中から銀色の棒を取り出したかと思った刹那、鋭い何か洋を襲いかかった。

「いつ……」

顔からカミソリ負けしかようなヒリヒリしたような痛みが走る。

そこに手を添えると、掌には真っ赤な血がまんべんなく付着していた。

(な、何なんだよこりゃ……………何が起きた？ ……風？)

訳が分からなかった。

だが、雨子が何かを取り出し出した瞬間、風が起きた。

考えても考えは纏まる気配は全く見えない。

洋は雨子を見る。

「……………扇？」

雨子の両手には銀色の扇が二本。

扇は開かれた状態で雨子の手にある。

「正確に言つと鉄扇ね」

「鉄扇……………」

雨子の言ったことと同じ事を小さく呟く。

鉄扇。

骨が鉄製の扇である。

扇であるが、鉄製であるために殺傷能力が高く、昔は武士も用に供した武器の一つであるのだ。

しかし、武器の正体があった所であの鋭利な痛みは説明出来ない。

「訳が分からないって顔してるわね。いいわ、ネタバレしてあげる」

その言葉と同時に雨子は鉄扇を大きく振った。

ガダンッ！ と、後ろの神座の上に掛けてある道場の看板が落ちる。

看板の端には微妙な傷があった。

「…………風の刃。それが私の武器よ」

まさか、と思った。

鉄扇という武器でそんな攻撃が出来ると言っのか？

だが、あの鋭利な痛みや鉄扇を振った瞬間に看板が落ちた所を見ると嘘を吐いているようにも感じない。

（風の刃…………）

どう対処すればいい？

この攻撃方法は後ろに行けば後ろに行くほど不利になる。洋の攻撃方法は竹刀や木刀などを使用とした近距離戦を得意とする為に、雨子の戦闘スタイルはあまりにも相性が悪すぎる。

（それ以前に俺は今竹刀すら持っていない状態…………クソツ、ヤバすぎる）

頬から流れる血を袖で拭い、改めて雨子を見る。

まさか竹刀や木刀などの武器を取りに行かせる時間を与えるとは到底思えない。

「…………くっ！」

洋は雨子に駆け出す。

策があるわけでは無い。でもウダウダ考えているよりは行動を！それが成田洋だ。

「素人、ね」

短くそう告げた瞬間、雨子の両手がブレた。

「グガアアアアア！！」

身体の至る所から鋭利な痛みが走り渡る。

洋の身体は反り返り、バランスが保てなくなり後ろに倒れ込む。

「あ、が……！」

休んでいる暇を雨子は与えない。即座に雨子は洋の元に駆け出し、鉄扇を洋に向ける。

洋は右腕をバネしに、右側に身体を寄せて雨子の攻撃を回避した。

「へえ、なかなかやるじゃない」

「グッ……」

ヨロヨロと立ち上がり、深呼吸する。

殴打でやられた痛みよりしつこいヒリヒリとした痛みが洋の身体を襲いかかっていた。

(……無理、かもしれないな)

とてもじゃないが勝てる気がしない。

実力がどうかという話ではないことを洋は気づいていた。

(でも……あの看板を取られる訳にいかないんだよな……)

拳を握りしめながら、

(せめて、せめて望美さんが帰ってくるまでの時間稼ぎ位にはなつてやるよ)

低い目標ではあるが、洋にとってはかなり難易度が高い目標だ。

洋は握りしめた拳を緩め、息を吐く。

精神統一をしているように深呼吸をし、

駆け出した。

竹刀や木刀がある神座のそばに。

「!」

どこに走っているんだ？ と疑問に思った瞬間に皆目見当がついた。武器を取りに行くつもりなのだ。

小さく舌打ちをした雨子は鉄扇を振るう。

風の刃が洋に襲いかかり、肉が切れる音が聞こえてくるが洋は止まらない。

洋の目に見えるのは竹刀と木刀だけ。

後もう少し、後もう少しで竹刀と木刀に手が届く

「やせない!」

あまりにも早く、俊敏な動きで洋の身体を蹴り飛ばした。洋の身体は神座へと叩きつけられ、身体中の酸素という酸素が吐き出された感覚がした。

過敏とも言える洋の武器所持の防止。

たとえ自分が遙かに優位でも相手が少しでも有利になる行動を防ぐ。例えば拳銃。拳銃は引き金を引けば死ぬにいかないにしろ、当たれば相手の動きは間違い無く鈍くなる。

それを防ぐ。自分の勝率を一〇〇パーセントの状態を保ち続ける事が網倉雨子の戦法。

「いったあ……」

叩きつけられた際に思いっきりぶつけた頭をさすりながら立ち上がる。

ポタポタと血を流しながら立ち上がるその姿はとても泥臭い。

「……チツ、間に合わなかったわ」

悔しそうに吐き捨てる声色は、自分の失態に対する自虐的なもの。

そんな雨子をよくわからない様子で見た洋。

「……」

運が良かった。

洋の右手には茶色の木刀が握り締められていた。

(やった……！ 何とか木刀を手に入れることに成功した……！)

洋の顔からは笑みがこぼれていた。

「 さつさと片付ける！ 」

雨子は走り出し、洋の元へ。

身体中に怪我を負っている洋の動きが鈍り、反応が一瞬遅れてしま
い雨子のかかと落としが脳天に直撃した。

蹴られた洋は神座と道場の床の間に叩きつけられる。

すかさず雨子は洋の首根っこを持ち上げ、神座の端に洋をぶつける。

「 だ…… 」

意識が飛びそうだ。

死ぬかもしれない。洋は本当にそう思うほど、洋の体力は限界に近
づいていた。

身体の至る所からは血が流れ、左目も半開き。
息も荒く、足も立っているのがやっとの状態。

歯を食いしばり立ち上がる。

負けるわけにいかない。

看板を取られる訳には、いかない！

「 ぐっ…… 」

ガクンと、膝が崩れ床に片膝をつく。

「頑張ったみたいけどもう終わりね。寝ていなさい成田洋くん」
雨子に握られた二本ある鉄扇の内の一本をしまい込み、右手に握られた畳み込んだ鉄扇の先端を片膝についている洋の脳天へと向け、振り上げる。

「ッ!!」

洋は歯を食いしばり、持てる力を振り絞るように両手を左へ伸ばす。伸ばした先には『久遠寺道場』と筆で書かれた長方形の看板。両端を持った洋は横殴りに振り回す。

完全に勝利を確信した、網倉雨子のミス。

看板は雨子の頬にストレートに直撃し、華奢な身体をぶっ飛ばす。重く鈍い音が道場内に低く響き、雨子は道場の真ん中まで飛ばされる。

「ハア、ハア、ハア……危なかった……」

神座の隣の壁に寄りかかりながら立ち上がる。

「……こいつは、捨てておかないとな」

殴られた際に雨子が手放した鉄扇を道場の下の窓から捨てる。理想的にはこの時に二つの鉄扇を捨てる事だったが仕方ない。

「……」

無言で立ち上がった雨子の顔には、看板で殴られた箇所が酷く青く

なっていた。間違い無く治療が必要な位に青い。

「……す」

「……あ？」

小さい声は洋の耳には届かず、聞き返すように返事をした。

すると、雨子は不気味な笑みを浮かべると、

「ここからは本気よ。あなたを倒す！」

「……上等だ。簡単に倒されるわけにはいかない」

二人の言葉は静かに道場内に小さく響く。

第九話・成田洋VS網倉雨子（後書き）

感想や評価などお待ちしております。

第十話・久遠寺望美VS網倉八雲（前書き）

望美の戦闘描写って結構難しい……洋はわりと簡単だったのに。

第十話・久遠寺望美VS網倉八雲

「ここならやり合えそうだな」

桂瀬公園の平屋に移動した二人はある程度の距離をおいて向かい合う。

平屋に移動したのには理由があり、一目がつきやすい公園で喧嘩をするわけにいかないからだ。

ここならば外から見ても何をしているかは分かりづらい。

荷物は少し埃っぽい平屋の端に置いてある。

中には年季の入ったテーブルや椅子、既に割られた鏡に何年も使われていないであろう洗面所も剥き出しの状態。

眉間に皺を寄せ、網倉八雲を睨みつけていると、八雲はタバコを箱から一本取り出し火をつけ、煙を口から吐き出す。

そしてまだ長いタバコを床に落とし、足で火を消すと望美に向かって鉄の棒を床に転がした。

カランカランと音を立て、望美の足元で止まる。

「……何のつもりだ？」

「お前、武器がないと戦えないだろ？ だからそれ使えよ」

「お前は どうするんだ？ 素手では私には勝てないぞ」

「別に素手でやるなんて言っていないだろう。俺はコイツを使うのさ」

そう言うと八雲は後ろを向き、子ども達の所有物だと思われる金属バットを手に取った。

どうやら目の前にいる少し枯れている声の男は特定の武器は所有していないと見える。

「金属バットはなかなかの強度を持っている。武器には最適だ」
「……」

金属バットの感触を確かめるように何回も手に軽く叩いた。

小さく舌打ちした後、望美は鉄の棒を手に取る。険しい表情は変わらない。

「さて、始める……かつ！」

瞬間、八雲は『瞬歩』という一種の高速移動を駆使し望美に近づく。狙いは望美の頭。

ガギンツッ！！ と金属と金属がぶつかり合う。

望美は鉄の棒を横にし、金属バットを防いでいた。

「ほう、よく反応出来たな」

「これぐらいは当然だ。次はこちらからいくぞ！」

望美は横にしている鉄の棒を上を持ち上げると、八雲の懐へと入る。体勢が崩れた八雲は、特に焦る事もなく余裕綽々で次の行動へと移る。

本来ならば鉄の棒は鳩尾を捉えていた。

だが、成田洋より細身なその身体に鉄の棒が通ることはなく、八雲の右手で鉄の棒が払われ望美は体勢が前へ前へとなくなっていたために身体のバランスが一瞬崩れた。

それを見逃しはすも無い八雲はすぐさま払った右手で望美の左頬を殴打した。

「ぐっ……っ！」

崩れかけた体勢を足で保ち、一旦距離を置く。

(強い……)

素直にそう思った。

だが、そう思うと同時に望美の中にある闘争本能に火が付いた。

「……っ！」

バツ！ と素早く動き出す。

しかし望美は八雲には向かわず年季の入ったテーブルのある場所へ向かった。

テーブルの端と端を持ち、望美は思いつ切り八雲へと投げつけた。

「こんなのが効くと思ってんのか」

やれやれと言わんばかりに八雲は右手に持っている金属バットを振り壊す。

テーブルはいとも簡単にバラバラになった。

「ん？」

八雲は目を疑った。

前にいるはずの久遠寺望美の姿が無い。

「…………！」

気配を感じ取った時には既に遅い。

瞬歩が使えるのは八雲だけではない。望美も使用しているのだ。

望美の持った鉄の棒は八雲の右頬辺りを完璧に捉えていて、鈍い音と共に平均より軽いであろう網倉八雲の身体はゴロゴロと転がっていき、平屋の壁に身体をぶつける。

望美は殴られた頬を拭いながら倒れ込む八雲を見据える。

（運が良かった……網倉八雲が油断していなかったら出来なかった技だったな……）

内心とてもホツとしていたりする。投げた瞬間、テーブルによって八雲の視界は防がれ、その瞬間に瞬歩で八雲の背後に近づくと、というのが望美の作戦。出来ないかもしれないと思っていたが案の定成功した。

「…………」

無言で立ち上がった八雲。

ポケットからタバコとライターと取り出すと、タバコに火を付け口にくわえる。

そして煙を吐き出すとほぼ同時にタバコによって枯れてしまったる声を平屋に響かせた。

「準備体操はこれまでだ。ここから本番だ」
「……」

三秒近く硬直状態が続いたが、八雲がタバコを吐き出したと同時に二人の瞬歩が炸裂。

目にも止まらぬスピードでガンガンガンッ！と金属と鉄がぶつかったり弾いたりする音が延々と続く。

(!)

何も考えるな。

考えたら死ぬ。

考えたら負ける。

一心不乱に負けないために攻撃をし続ける。

だが、攻撃すれば防がれるというのが続く。

突破口が見いだせない。それ程八雲には隙が見当たらないのだ。

デタラメに見える動きだが、本当はそうではない。先の先を完璧に見据えながら八雲は攻撃している。

次第に息が切れていく。でも呼吸しては駄目だ。その一瞬、呼吸をするための動作をしたら間違い無くやられるだろう。

それは八雲も同じだ。

八雲の表情も次第に険しいものになっていく。

ギギギッ！！とようやく動きが止まった。

剣道でいう鏢迫り合いという形で。

二人の顔からは汗が流れていて息も切れていた。

「……………」

「……………」

睨み合うように向かう二人は同時に距離を置く。

これは自分の間合いではないからだ。

ふう、と一息ついた八雲は、

「そろそろだな……………」

と、呟いた。

何の意味が分ならず望美は怪訝な表情を浮かべ、

「そろそろって何のことだ？」

「……………なあ、久遠寺望美。俺達の狙いは知っているよな？」

「……………看板か？」

「そつだ、看板だ」

うんうん、と頷く八雲に少しイライラしながら望美は声を荒げた。

「何が言いたい!？」

「いや、よく考えてみるよ。俺達は看板が欲しい。手に入れる為には戦わなくてはならない」

望美は黙って訊く。

「なら、どうして俺はお前を待ち伏せしなきゃならないんだ？」

望美はまだ八雲が何を言いたいか分からない様子。それ程冷静さを欠いていると言える。

そして、次の言葉で全てを知る。

「普通なら、道場に向かうはずだと思わないか？」

「……！」

しまった！ と望美は八雲の言いたい事を理解した。

気がつかなかった。

どうしてこんな簡単な事に気付かなかったんだ！ と後悔する。

よく考えると簡単に分かる事じゃないか。

網倉八雲は言わば囃、久遠寺望美を止める足止めだったんだ。かなりの実力者である望美を封じれば後はほとんどん拍子。

門下生は望美と、最近入門した成田洋のみ。

もし……いや、八雲は『俺達』と言っている辺り間違い無い。網倉の刺客は複数居て、網倉八雲を除いた網倉関係者が今、久遠寺道場へと足を運んでいるはず。

もし洋が道場にいるならば、実力がまだまだ未熟な洋は負ける。

そして看板も持って行かれ、洋もヤバい怪我を負うかもしれない。

全てが全て迂闊だった。

奥歯をこれでもかという位噛み締め、自分の不甲斐なさを改めて感じってしまう。

(成田……！)

心の中で呼ぶのは焦げ茶色のツンツンとした髪型の少年。

こうなると行動することは決まっている。

望美はその場に鉄の棒を投げ捨て、平屋を出ようとするが、

「ちょっと待った。まだ俺との決着はまだだぜ？」

金属バットで入り口を防がれ、タバコをくわえながら歪んだ笑みを浮かべる八雲に望美は舌打ちする。

通すわけが無い。

望美に作戦を教えたのも多分そろそろ決着がつく頃だからだ。

眉間に皺を寄せながら険しい表情を浮かべる望美に対し、楽観的に笑みを浮かべる八雲。

望美は投げ捨てた鉄の棒をまた手に取り、鉄の棒の先端を八雲へ向ける。それはまるで宣戦布告のようにも見えた。

「さっさと蹴りを着ける！ かかってこい！」

「そうこなくっちゃ」

グニヤリ、と歪んだ笑みを浮かべる八雲は枯れている声で望美との対決を改めて受けた。

（成田……道場に居るなら何としてでも持ちこたえてくれ……すぐに私が行く！）

望美は駆け出し、八雲へと攻撃を仕掛けた。

第十話・久遠寺望美VS網倉八雲（後書き）

感想や評価など待っています。

行間

網倉八雲と網倉雨子は負けるわけにはいかなかった。

網倉道場は昔、最強を育てる為に存在する道場と呼ばれていた。最強と言われていた所以は個人の才能を伸ばす所にある。蹴りの攻撃を得意とする人ならば、その才能を伸ばし、拳を振るう攻撃を得意とする人ならそれを伸ばす。

だから強かった。

一つの流派に捕らわれないからこそ、強かった。

だが栄華というのは何時かは廃れる。

先代、網倉八雲と網倉雨子の父、網倉雷牙が十年前に病死してしまい、最高の師範が消えた網倉道場は坂を転がる勢いで廃れていった。やがて網倉道場に入門していた人はだんだん減っていき、今では数えきれぬ位しか居ない。

かつての栄華を取り戻したかった。

だったらどうすればいい？

簡単だ。再び網倉の人間は強いという事を響き渡らせればいい。

それからの行動は早かった。網倉八雲と網倉雨子は永瀬市の道場の看板を全て手に入れるのは時間の問題だった。

鉄扇を巧みに使いこなす網倉雨子。

周りの物を武器に使い、臨機応変に戦う網倉八雲。

網倉雷牙という人間の血を直接受け継いでいる二人は見る見るうち
に頭角を表していき、網倉道場の名前を再び轟かせた。

永瀬市の道場の看板を全て奪い取った二人の次なるターゲットにしたのは久遠寺道場だ。

こうして二人は久遠寺道場に向かう。

かつての栄華を取り戻すために。

第十一話・勝敗の行方（前書き）

いやあ、何故か筆が進むなあ。
でも文才がなあ……

第十一話・勝敗の行方

視界がブレる。

正常に地に足を立てているはずなのにグルグルと回った後のように身体のバランスが保てていないような気がする。

バツ、と網倉雨子は鉄扇を広げる。

それとほぼ同時に雨子は鉄扇を素早く振るい風の刃を作り出し、成田洋へと喰らわせる。

(……………動けよ……………！)

自分の意志とは裏腹に身体が動かず、風の刃が洋の腕や足、胴体や顔に切りかかった。

洋の身体中から血が大量に流れ、重力に逆らわず下へと落ちていく。

「どうしたのかしら？ 私はサンドバッグに攻撃しているわけじゃないんだから、少しくらい反応見せなさいな」

雨子の挑発にも反応出来ない。

ここで挑発に乗り雨子へ突っ込めば再び風の刃の餌食になるのは目に見えていること。

洋は持てる力をフル活用し足を無理矢理に走らせる。雨子の元には向かわずに洋は久遠寺家の庭へと向かう。

(……………狭すぎる……………、何とかもつと広い場所に行かないと……………！)

洋の走る姿を見据える雨子。

それはわざと走らせて、何かしらの行動させようとしているように。

縁側まで走り靴を取り、庭へと走っていく。

が、途中で足が絡まり地面に身体が倒れ込む。

(ぐっ……、身体が言うことを訊いてくれない……！)

靴を履き、ゆっくりと立ち上がる。

雨子も道場から出て来て庭へと降りる。

「なるほど、逃げ場を増やす為に外に出たってわけ。ふうん」

余裕の態度に変化は見られない。

これが必ず勝てるという自信なのか？ と洋は思った。

「だけどね、あまたが倒されるのは変わらないけどね」

ニヤリと余裕の笑み。

洋は木刀を杖の代わりのようにして海藻のようにユラユラと立っている。立っているその力無く見え、おそらくデコピン一発で身体が反り返りぶっ倒れる位だ。

「は、はは……、そうだな。俺はお前には勝てない……。だけどな」

洋は後ろを向け、森の中に走っていく。

そう、あの迷路のような森に。

「へえ、面白いじゃない。かくれんぼって事ね。受けて立とうじやない」

面白そうな笑みを浮かべながら森の中へと入っていく。

森の中は草木で生い茂っており、隠れる場所は数え切れない位あるのでそれなりに時間は稼げるだろう。

(……出血が酷いな……)

本格的な治療をしない限り血は止まらない。自然な治癒だけでは手に負えないだろう。

人の身体が隠れる位の太い木に寄りかかりながら休憩をする。なるべく息を殺し、雨子に悟られないように周りを見渡す。

パキパキ、と枝が折れる音が通り道から聞こえてくる。通り道を歩いてきてる証拠だ。

「何処にいるのかしら、ねっ！」

声は木が倒れ込む音にかき消される。

(な、なんだ！？ まさか木を切り倒していやがるのか?)

強行突破を敢行しているようである。

これは果てしなくマズい。よく考えると風の刃という物の切断手段がある雨子が呑気に探すような行動をするわけがない。

(マズい……このままじゃ見つかる)

ヨロヨロと立ち上がり、洋は木の上に登っていく。
木刀を改めて力強く持ち直し、木が薙ぎ倒されていく通り道の方に目を向け、一旦深呼吸し心を落ち着かせた。
朦朧としかける頭を振り気休めにもならないような意識覚醒をさせる。

地上から洋が登った木の高さは大体五メートル。

そして、

薙ぎ倒された木の向こう側から網倉雨子の姿が見えた。

五メートルという高さに躊躇している暇は無い。洋は太い木の枝から駆け出す！

狙いは勿論雨子だ。

木刀を右手に持ち、大きく後ろへ腕を伸ばし、

「うおおおおおお！！」

「！！」

反応が少し遅れてしまった雨子は鉄扇を閉じ防御へと入るが、上からの勢いと洋の力が鉄扇の防御を切り崩す。

鉄扇が弾かれ、力が有り余った木刀の棟の行き先は雨子の肩。

殴り飛ばされた雨子は肩を掴み苦しそうな表情を浮かべながら雨子が薙ぎ倒した木に背中をぶつける。

五メートルという高さから飛び降りた洋は体勢を崩しながらも何と

か立て直し、持てる力を全て使い切るように雨子へダッシュする。
雨子も立ち上がり鉄扇を取り、攻防に向かう。

なめるな、とばかりに洋は攻め続ける。

左肩が痛いのか左腕は使わず右だけを使い洋のデタラメな基本がなっていない攻撃を受け続けた。

正直こう言うのが一番辛い。基礎がなっていないく、滅茶苦茶な剣術だと法則性が見いだせないからだ。基礎通りの動きしかできない人間ならば簡単に動きの法則性を見だし、それを防ぐ事も難無くこなせるはず。

だが、目の前にいる男からは法則性もクソも無い。ただデタラメに、ただやりたいようにやっているタイプ。

考えてデタラメをやるタイプを雨子は知っている。そいつは基礎が完璧な癖にわざとデタラメな動きをする。基礎とデタラメを入り混ぜらせるウザイタイプだ。

次第に余裕がなくなる雨子。まさか左腕を使えなくさせるような事をやってくるなんて夢にも思わなかったから。

洋も洋で余裕は無い。

怪我で体力が大幅に削られ、明らかに顔の色が悪い。血が足りないんだ。

元々全快ではなかった洋の身体に雨子が繰り出した風の刃によって無数の擦り傷からの出血多量。

最早立っている事が精一杯である洋が何発もの攻撃を出来る事はあ
る意味奇跡とも言える。

限界などとうに越えている。最早気力だけで、根性だけで攻撃を続けているのだ。

(いける……！ あともう少しで……！)

決死の攻防。

とにかく早く雨子を倒す。

偶然でもいい。

ミラクルでもいい。

負けてはならないんだ。

負けたら看板は取られてしまい、久遠寺家の人達に最悪な仕打ちをやってしまうことになる。

それだけは、それだけは避けなくてはならない。

せめて望美が帰ってくるまで持ちこたえてみせる。

「ぐっ……！」

雨子の顔は苦痛へと成っていた。

攻められ後退していると、学校にいた時に降った雨の所為で地面がぬかるんでいる為、それに右足を取られ身体を不自然に揺らぐ。

「しまっ……！」

「貰った！」

勝ちを確信した。

洋は木刀を握り締め、後ろへ引く。

木刀の先端は確実に雨子の身体をロックオンしている。

（まだ、やられるわけには……いかないのよ！）

体勢が崩れた事を逆手に取り、鉄扇をぬかるんだ地面に突き刺し泥を洋の顔面にぶっかける。

ベチャツ！ と目の辺りにかけられ、洋は視界を防がれる。

「くそっ……！」

目を擦るが泥は取れる所か余計に広がっていき、なかなか取れない。

これを好機とみた雨子はすぐさま攻撃の体勢に入った。

鉄扇は閉じたままで洋に攻撃し始める。

まずは右腕の二の腕に鉄扇をぶつけた。

バチンツ！！ と。

「ぐ、アア……！」

視界はまだ晴れない。砂利が目に入っている為、目が開けれない。

殴られた二の腕を庇うように手で覆い、痛みが身体中を走り抜ける。

洋は倒れ込み、唸り声を上げながら絶句する。

（い、いてえ……！ くそっ、何でだよ……あともう少しだったじやねえかよお……クソオ！）

「ふ、ふふ。危なかったわ……」

乾いた笑い声が洋の耳に届く。

視界が潰され、利き腕も負傷。

目を擦りながら立ち上がる。何度倒れようと、視界が潰されようと、利き腕も負傷しようと思死鳥のごとく立ち上がる。

その姿に雨子は絶句した。見た目はもう負け犬そのものなのに。明らかに自分の方が有利であるはずなのに。

どうして、こんな大きく見える？

歯を食いしばり、鉄扇を再び振るわせた。

バチンバチンッ！！と死なない程度に人間の急所を確実に狙っていく。

「ぐがアああああッ！？」

殴られた箇所を押さえ、洋は絶叫する。

痛い、なんて言葉じゃ収まりつかない感覚。

気が失いそうだ。

洋は雨によってベチャベチャになっている地面に転がる。

泥に含まれた水分が洋の制服に染み込んできて気持ち悪く、風の刃によって切られた切り傷に入っていてかなり染みる。

(……………くそっ、やっぱり俺は……………望美さんの足を引っ張ってしまっ
のか……………！)

情けなかった。
自分の実力不足が恨めしかった。
自分は役立たずなのか？

(俺は……俺は、役立たずじゃ、無い！)

洋はまたも立ち上がる。
そして、

「うがあああああああああッ!」

雄叫びのような凄まじい声が森中に響き渡る。

木に生えている草が揺れる。

森にいる鳥が一斉に森から放たれどこかへと飛んでいく。

雨子は啞然となった。

それと同時に恐怖も覚えてしまっている。

倒れてしまってもおかしくないぐらいの怪我を負っているのに
どうして立ち上がる？

「あ、あ……」

言葉が出ない。出せない。

言葉を発することを許さないような、鬼気迫る雰囲気洋から出て
いる。

洋は木刀を強く握りしめ、

(や、やられる……！)

目を閉じ、脅えきった雨子は咄嗟にとるような顔だけを守る防ぎ方に成っていた。

「……あ、あれ？」

何時まで経っても攻撃が来ず、雨子は薄目を開けて洋を見た。

洋は木刀を振り上げた状態で固まってしまっていて、それからの動作が来る様子が全く無い。

そして、

ガクンと、洋は膝から崩れ落ち泥だらけの地面に崩れ落ちた。

第十一話・勝敗の行方（後書き）

感想や評価などお待ちしています。

第十二話・意外な救世主(?)

埃っぽい平屋の中で男女の殺し合いとも言える攻防が繰り広げられていた。

女の方は鉄の棒を刀のように振るい、男の方は金属バットをデタラメな動きで鉄の棒を防ぎ、攻撃も行う。

久遠寺望美の太刀筋はとても綺麗、あまりにも綺麗すぎる。綺麗すぎるが故に決定打が出ない。

網倉八雲はそれとは対照的。綺麗でなく、まるでチンピラのような喧嘩のような攻撃。

だが、それなのに隙が見当たらない。

それは何故だ？ と望美は自分自身に問い掛ける。答えはすぐさま出た。基礎がなっているからだ。

基礎がなっているのにワザとチンピラのような動きをしているのが網倉八雲だ。

対照的な事がもう一つ。

表情だ。

望美の表情は眉間に皺を寄せ険しくなっているのに比べ、八雲は薄ら笑いを浮かべていた。

攻撃にも変化が見られる。綺麗な太刀筋であった望美の攻撃は少しずつではあるが荒くなっていく。

「はああああッ!」

轟なる金属音が平屋に響く。
鉄の棒と金属バットがぶつかったのだ。

一瞬の硬直。

先に動いたのは八雲。

望美の手首の裏側を掴み、脚の関節を払うように蹴ると望美は体勢を崩すが手首を押さえられている為に不自然な形になり左側に身体が揺れる。

ガギツ！！と。

よろけた瞬間を狙っていたとばかりに望美の左頬に八雲のアップパーが突き刺さる。

手首を離れたと同時に殴られた望美の身体は少し宙を飛び背中から埃っぽい床に倒れ込む。

痛がる素振りを見せる暇もなく八雲は無理矢理に服を掴み立たせ、拳、肘、脚、膝を用いながら望美の身体に何発もの攻撃をし続ける。この攻撃方法はタイの国技であるタイ国式ボクシング、ムエタイだ。サンドバックのように攻撃を受け続ける望美の顔からは痛みと焦りの色が隠せずにあった。

八雲の身体能力にも厄介であるのにムエタイも使われたのでは手の打ちようが無い。それに平均男性より華奢な腕や脚から繰り出される攻撃は速く、そして重い。

「がっ……」

搾り取って出した声が望美から漏れる。

「どうした、もっと俺を楽しませてくれよ！」

愉快そうにようやく欲しい物が手に入ったかのような子供みたいな
笑み。

まだまだ攻撃は止まらない。

「はぁ……無駄骨だったなあ」

茶色く長い髪を横に縛った髪型で今時の女子高生といった風貌の女の子、柴田響乃は桂瀬市の商店街を肩を落としたながら歩いていた。彼女は永瀬市には帰らず桂瀬市を歩き続けていたのだ。理由は単純、男漁りのためだ。

桂瀬市をわざわざ傘を差してまで歩き続けたのにこれといった男は見つからずじまい。

傘を引きづりながらつまらなそうに歩いていくと、

（そう言えば、商店街を抜けて少し歩くと確か望美の家あったっけか）

去年何回か久遠寺家へ遊びに行った事がある。

だが、数えきれぬ位しか行ってない。

これも理由は単純だ。

あの長つたらしい石段を歩くのがメチャクチャ面倒くさく疲れるからだ。

(それに今頃剣道の練習やってんだろっなあ、暇だし見に行ってみようかな)

それに成田洋はどうなっているかも気にはなっていた為、響乃は少しからかってやるうと小学生のような気持ちで商店街を歩いていく

と、

「ねえねえ、そこの別嬪さん」

ピタリ、と響乃の動きが止まる。

響乃は自分のことに自信を持っているようであり、(自称)美少女であるとも信じていたりする。

声が出た方に顔を向けると、芳ばしい香りと四〇近いであろうおっさんというよりはおっちゃんと呼んだ方がしっくりくる男が店の一角の店内に豪快な笑顔を浮かべながらそこにいた。

一応だが確認しておくことにする。

「別嬪さんって、私のこと?」

「当たり前だろう。君以外にどこにいますと言っただい?」

これは間違い無くお世辞であるのだが、お世辞であっても褒められて嬉しくない人間はいない。
それは響乃も同じ。

「やだなあ、そんなの当たり前なのにねえ。ごめんなさい、普通な事訊いて」

「あ、うん……そうだね」

冷や汗を流しながら、少し引いたような態度をとるおっちゃん。

「で、何のよう？」

「あ、そうだそうだ。どうだい、ウチで作ったたこ焼き食べていけないか？」

この芳ばしい香りはたこ焼きから。

上にある看板をみると『たこ焼き屋』と書かれていた。

おっちゃんの手前にはたこ焼き機が並べられていて、その隣には保温出来るポックスがあり、プラスチック製のパックにはメチャクチャ美味しそうなたこ焼きが並べられていた。

響乃の口の中に無意識下に唾液が出てくる。

「じゃあ、一つください」

「S、M、Lがあるけどどうするかい？」

「ん……じゃあ、どうせならLで」

「あいよー、二八〇円ね」

安っ！ と思いつつながら財布から三〇〇円を渡し、お釣りである二〇円を受け取る。

「はいよ、Lサイズのたこ焼きね」

袋に入ったたこ焼きを受け取り『また来てくれよー』という声を背中に受けながら食べ歩きを始めた。

爪楊枝を上から差し口に運ぶ。

「あ、結構美味しい」

そんな感想が無意識的に出る位美味しいのだ。

作り置きだったのに外側はカリカリしていて中はトロトロ。それに熱い為食べづらいが、これがたこ焼きの理想像であろう。

それに上に乗っているネギも美味しさを引き立たせている。

美味しい美味しいと思いながら歩いていくと何時の間にか商店街を抜けていることに気づく。

ちょうど桂瀬公園差し掛かり、四個目のたこ焼きを口に運ぼうとした瞬間、

ガダンツ！！ と公園の入り口から真っ直ぐの場所にある薄気味悪い平屋から凄まじい衝撃音が聞こえてきた。

な、なにっ！？ と思いながら平屋に目を向けた。

ここからでは中の様子が見えない為、恐る恐ると公園に入り平屋の引き戸を少しだけ開けた。

そこには衝撃的な光景が広がっていた。

自分の友人である久遠寺望美が金髪の不良に一方的に殴られ、蹴られをやり続けられていた光景。

身体が硬直し、さつき二八〇円で購入したたこ焼きを下に落とし、たこ焼きがグチャリと音を立て潰れた。

(ど、どういうこと……？　なんで望美がこんな酷い暴力を……)

思考回路が麻痺する。

望美は誰かに恨まれたりするような人間ではないことを響乃は知っている。だからこそ、響乃は余計に分からなくなる。

響乃の存在に気がついたのか暴力を止め、金髪の男はこちらに目を向ける。

(誰だコイツ……)

網倉八雲は髪を横に縛っている女を見て考える。勿論答えなど出て来るわけもない。

はあ、と興ざめだと言わんばかりに溜め息をついた八雲は望美の胸ぐらを掴んでいる手をゴミを捨てるかのように離し、引き戸の近くにいる女に近づいていく。

近づいていくに連れ、目の前の女は恐怖に染まった臆病な目を八雲に向けていた。

そして女を見て一言。

「邪魔」

「！」

「ザザザッ！！ と素早く入り口を空ける。
退いた引き戸を通り過ぎ公園を出て行く。」

（こ、怖かった……）

未だに身体が動かない。
金髪の男の背中を見ながらそう思う。

「……は、望美！」

ハッと我に返った響乃はボロボロになっている望美の元へ走る。

望美は至る場所が殴打により痣や流血が酷い。
早く病院に行かなければダメなレベルの怪我。

響乃は携帯電話を取り出し病院に電話しようとしたが、

ボロボロな手が、それを防いだ。

弱々しく簡単に振り解ける力。だが響乃はけして望美の手を振り解
こうとはしなかった。
出来なかった。

「……き、響乃……私を、自宅まで……運んでくれ……ゲボ、ゲボ
ッ」

「なに言ってるの！ 早く病院に行つて治療しないとヤバいつて！」

「ハア……ハア……頼む……、自宅で……なり……だが、危ない……」

……」

「成田？ 成田洋くんの事？」

「そつだ……頼む、凶々しい事は承知だ……でも、なにも訊かず、私を……運んでくれ……！」

弱々しく感じるのに、強い意志を感じた。

響乃はガシガシガシッ！！ と頭部を搔いた後、優しく望美を背負う。

「何が起きているか分からないけど、兎に角成田くんの事が片付いたら早く病院に行かせるからね」

「すまない……」

ボロボロな望美を背負いながら平屋を後にした。

第十二話・意外な救世主(?) (後書き)

感想や評価などお待ちしています

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6523z/>

センター開始！

2012年1月9日13時45分発行